

## 西遊記物語の成長—世徳堂本にいたるまで

大塚秀高\*

『西遊記』は『大唐三蔵取経詩話』以降、それぞれ童子戯の〈唐僧取経〉、『朴通辞諺解』、『迎神賽社礼節伝簿四十曲宮調』、福州平話西遊記、楊致和本(楊本)により想定される第1期、第2期、第3期、第4期、第5期の原『西遊記』をへて、【世徳堂本西遊記】となり、そこから、【江流和尚】が削除されて世徳堂本(世本)となった。朱鼎臣本(朱本)は楊本(ないしその祖本の【楊本】)と世本を組み合わせ、【江流和尚】を独自に復活させるなどした簡本である。

キーワード：原『西遊記』【世徳堂本西遊記】童子戯〈唐僧取経〉【江流和尚】

### まえがき

筆者はかつて「三国志物語の成長—『三国志平話』前後から毛宗崗本『三国志演義』まで—」<sup>1</sup>において、『三国志演義』の毛宗崗本にいたるまでの成長過程につき考察してみた。本論では『西遊記』について、同様の試みを、筆者が『三国志演義』にととの毛宗崗本にあたりとみなす世徳堂本(世本)までに限っておこなうことにしたい。とはいえ、『三国志演義』と『西遊記』とでは諸般の事情がかなり異なっている。否、まったく異なるといってもよいくらいである。以下ではまず西遊記物語の成長の跡を示すはずのさまざまな資料<sup>2</sup>につき論ずることにしたい。ちなみにここでいう西遊記物語とは、すべてのジャンルの文学、芸能、芸術形式に反映、保存されている『西遊記』の意味である。

『三国志演義』には『三国志平話』という重要なマイル・ストーンが残されていた。『西遊記』にも『西遊記平話』が存在していた痕跡が『朴通辞諺解』(『朴通辞』の原本は元の至正七(1374)年よりやや後に成立したと推定されている)などに残されているが、一部を除き、三蔵一行の経た難の羅列にすぎない。『大唐三蔵取経詩話』(ならびに『大唐三蔵取経記』)は『西遊記』以前の西遊記物語の姿を示す貴重な存在であるが、『三国志平話』が元の「至治新刊」とされるのに対し、宋代の成書であって、明代の『西遊記』とは時代の懸隔が甚だしい。『永楽大典』所引の「(魏徴)夢斬涇河龍」の段は、それが当時の西遊記物語に取り込まれていたろうことを示す貴重な資料ではあるが、『朴通辞諺解』の「車遅国」の段と同様断片に過ぎない。政治的な背景も考えられ

\* おおつか・ひでたか、埼玉大学・名誉教授、中国俗文学

1 『日本中国学会報』第70集、2018年10月

2 西遊記物語に関する資料を蒐集した労作としては、朱一玄・劉毓忱の『《西遊記》資料匯編』(中州書画社、1983年7月)、劉蔭柏の『西遊記研究資料』(上海古籍出版社、1990年8月)、蔡鉄鷹の『西遊記資料彙編』(中華書局、2010年6月)などがある。

る<sup>3</sup>。楊景賢(言)の『楊東来先生批評西遊記』(以下では『西遊記』雑劇と称する)は明初のものでされており<sup>4</sup>、6巻24齣という、雑劇のなかでは『西廂記』とならぶ雄篇であるが、そこに当時の西遊記物語が余すところなく演ぜられていたかはさだかでないし、舞台芸術ゆえの制約もあったであろう。それゆえこれまでも宝巻のごとき、俗文学における西遊記物語が検討の俎上に上ってきたのである。

## 一 俗文学文献における西遊記物語

寧夏で発見された『銷積真空宝巻』の抄本に西遊記物語への言及があることを初めて指摘したのは鄭振鐸である。鄭振鐸はその「三十年来中国文学新資料發現記」において、「既同在宋元刻的藏本経堆中、頗有為元人抄本的可能」と述べた<sup>5</sup>が、これは勇み足で、たちまち「頗疑心此卷是明朝的写本、也許是晚明的本子」と胡適に反論された<sup>6</sup>。蔡鉄鷹は註2に挙げた書で「明弘治年間興起的民間宗教羅教(又称羅天教)的経巻」と述べている。

『銷積真空宝巻』以外にも西遊記物語に言及する宝巻は複数あるが、その成長過程を語るうえで意義のあるものといえば、『先天元始土地宝巻』において他にあるまい。『先天元始土地宝巻』は、無極聖祖の化身の土地が仏に会おうとして道に迷い、結句天宮をさわがせ、齊天大聖孫悟空などと大立ち回りを演じ、それまでの功德を無にしたと自ら紅爐に跳び込み焼死して土地神として祀られることになる経緯を語ったもので、鄭振鐸はそこに(『華光天王伝』と)『西遊記』の「影響」をみた<sup>7</sup>。「這是從來不曾有過的一個伝説」「明清間の刊本」ともいうが、「影響」という以上、鄭振鐸がこれを『西遊記』以後の創作とみていることにまず間違いはない。だが筆者はそれと異なる見方をしている。刊本にせよ抄本にせよ、その刊行ないし写定の時期をそこにみえる内容の成立時期と考える必要は、こと俗文学文献に限っては必ずしもない、というのがそれである。わけもなく内容の成立時期を提前することは厳に慎むべきであるが、出版される機会などそうそうない俗文学作品のそれを、あたかも刊年がそれであるかのごとく論じ、それで能事終われりとしてよいとは思えない<sup>8</sup>。ましてや抄写時期がさだかでなく、重抄の可能性も排除できない抄本の場合、それを根拠らしい根拠もなしに定めてよいものではあるまい。

3 拙論「斬首龍の物語」(『埼玉大学紀要 教養学部』第31巻第1号、1995年9月)を参照されたい。

4 孫楷第「吳昌齡与雜劇西遊記—現在所見的楊東来評本西遊記雑劇不是吳昌齡作的」(『滄州集』所収、1965年12月)。原載は『文学』第5巻第1号、1935年7月。

5 『中国文学研究』所収(作家出版社、1957年12月)。

6 「跋銷積真空宝巻」(『国立北平図書館館刊』第5巻第3号、1931年)。

7 『中国俗文学史』(長沙商務印書館、1938年8月)の第11章「宝巻」。

8 鄭振鐸の註7の書と同文を引く劉光民の『古代説唱辨体析論』(首都師範大学出版社、1996年8月)は、「鄭振鐸先生所藏此卷正是明清間梵籙本、因此、可以判定《土地宝巻》為明末或清初時期的作品」と述べるが、鄭振鐸は梵籙本としておらず、それを「明末或清初時期的作品」とする根拠に持ち出したのは劉光民である。なお『先天元始土地宝巻』は現在北京の国家図書館に蔵されている(『西諦書目』集部下宝巻類著録、書号563)。

そもそも『西遊記』は、実在の人物である玄奘三蔵が唐の太宗の御代に国禁を犯して印度に出国し、多くの経典を携えて帰国した史実<sup>9</sup>を核にしているが、それはあくまで核に過ぎず、事実は民間に流布していたこれと有関、無関のさまざまな物語が巷間の口承芸人（とそのシナリオライター）により緋い合されて成ったものに、後世の文人（といっておくが一人とは限らない）が創作の腕を振るって出来上がったものであった。

ひるがえって、鄭振鐸の取り上げた『先天元始土地宝卷』であるが、『西遊記』の孫悟空にあたる存在を土地神としている。『西遊記』の孫悟空は、齊天（天に斉しい）大聖を名乗り、天と地のみを祀り、福州平話などでは「地仙祖」とされる鎮元大聖と義兄弟となり、二郎神との闘いにおいて切羽詰まるや土地廟に化け、何かというと土地神を呼び出しては情報を得るというキャラクターであった。加えて『先天元始土地宝卷』の土地は太上老君の八卦爐ではないものの、靈山仏前の紅爐に跳び込んでいた<sup>10</sup>。両者の関係はいずれか一方が他方を改作したものである可能性が高いが、ア・プリオリに『西遊記』が先行したと考えねばならぬものでもなかろう。両者の内容の先後関係については、書誌学以外の方法も援用したうえで勘案すべきなのではあるまいか。

既述のごとく、『西遊記』が巷間に流布していた出自の異なる複数の物語を玄奘による印度への取経の旅にある目的にそって緋い合せたものであるのなら、その目的とは何か。当初からそうであったわけではあるまいが、ある時点以降は、前半で孫悟空、玄奘三蔵（とその父陳光蓋）、唐の太宗をそれぞれ主人公とする三つの死と再生の物語（五行山における五百年、江流と龍宮滞留、入冥がそれ）を語り、しかる後にその三者により三位一体でなされる拡大地獄めぐり（西天取経）と再生（帰国）、さらには孤魂超度を語るようになったというのが筆者の見立てである（以下では以上の四つの物語を【大開天宮】【江流和尚】【唐太宗入冥】【西天取経】とよぶ）。とはいえこの三者が西遊記物語に加わった時期は同一ではなかったろうし、三位一体でなされる拡大地獄めぐりにについても、世本刊行の時点ですでにそれが目立たないようになっていたとおぼしい。

そもそも西遊記物語は枝分かれしつつ、ジャンルを超えて形成されていったから、上記三者の勢揃いした西遊記物語の成立後であっても、そうではない西遊記物語も存在したであろうし、逆に先の目的が目立たなくされた後であっても、その痕跡を鮮明にとどめる西遊記物語も存在したに相違ない。

万暦 20 年の刊行とされる世本は現存最古の百回本の『西遊記』であるが、これに先行し、これが依拠した【世徳堂本西遊記】（仮にこのようによぶが、世徳堂から刊行されたとは限らない）には間違いなく【江流和尚】が存在したはずである。それが世本で削除されたのは、【世徳堂本西遊記】の段階で三蔵の経るべき九九八十一の難の構想が持ち込まれたため、かなりの数の新しい難の追加が求められることになり、関係者（書肆の老板ないしはそのお雇いを含む文人）がてっとり早い手段として、【江流和尚】を構成する要素のいくつかの全部または一部の構想をそれに転用したり（甚だしくは【西天取経】内にす

9 玄奘の『大唐西域記』ならびに慧立・彦棕の『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』がそれ。

10 拙論『先天元始土地宝卷』について」（『埼玉大学紀要 教養学部』第 50 巻第 2 号、2016 年 3 月）で詳述している。

で存在していた難を加工して再利用したり、二度のお目見えをさせたり)したからではなかったか。その作為があまりに露骨であったため、世徳堂は【江流和尚】の本体を省くことにしたのかもしれない。とはいえ、おそらく既に持ち込まれていたはずの三位一体の構想を構成する重要な一角である【江流和尚】の本体を省いてしまっただけでは本末転倒と考える清代の書肆により、【江流和尚】は復活するにいたったのではないか。以下ではとりあえずこの予想にそって考察を進めてゆくことにしたい。

ちなみに三蔵帰国後の孤魂超度であるが、『西遊記』とならんで明の四大小説に挙げられる『三国志演義』『水滸伝』『金瓶梅』のいずれにも、漢族にとっては異域・異国への征伐後や異国から侵略を受けた後にその場面が置かれていた。だが清代以降の小説には、管見ではあるが、そうした場面は存在しないようである。しからば孤魂超度の場面の存在こそは、それが口承文芸、あえていえば宗教口承文芸にルーツを持つものであったことを示す端的な証拠とみてよいのではないか。そうした本来は核であった部分であっても、長期に亘る成長史の中で、創作され付加される部分が増えるにつれ、排除されないまでも軽視され背景に退いていったのではなかったか。『西遊記』で八大金剛に送られ帰国した三蔵一行が、持ち帰った真経を読誦せよとの太宗の求めに応えることなく、そそくさと西天に帰ったのがその好例であろう<sup>11</sup>。

## 二 【大鬧天宮】

『大唐三蔵取経詩話』は巻上第一葉（と巻中第二、第三葉）を欠き、「行程遇猴行者処第二」で始まっている。目次の類がないため「第一」がいかなる内容のものであったかは不明といわざるをえないのだが、おそらく三蔵法師の旅立ちまでの経緯を述べる部分であって、【大鬧天宮】を語ってはいなかったろう。とはいえ上記「第二」で猴行者が自身を「我是花果山紫雲洞八万四千銅頭鉄額獼猴王」と紹介をしているから、そこに書かれていなくとも、猴行者（『大唐三蔵取経詩話』では孫の姓も悟空の法名もなかった）と花果山がすでに結びつけられていたろうことに疑問の余地はない。さらに「入王母池之処第十一」によるなら、猴行者がかつて西王母の蟠桃を盗んだことも明らかである。しからば後日【大鬧天宮】に結集する物語のいくつが西遊記物語の一部として語られていたろうこともまた確かであろう。

明初のものとされる楊景賢の『西遊記』雑劇の巻3第9齣「神仏降孫」に登場する花果山紫雲洞の孫行者は、齊天大聖を兄とする通天大聖であって、金鼎国の女を妻とし、太上老君から金丹を、王母からは仙衣や仙桃を盗み、哪吒と闘うなどした後に観音に「压在花果山下」されている。それゆえ『大唐三蔵取経詩話』の猴行者よりはよほど『西遊記』の孫悟空（齊天大聖）に近づいている。とはいえその悪行は『西遊記』では黄袍郎や黒熊精の仕業にうつされているものであって、花果山の位置も異なっている（後述）。悟空本来の悪行は、『西遊記』雑劇以後に新たに創作（或いは肉付けされた）キャラクターに

11 『西遊記』では持ち帰った経巻の5048巻に合わすべく往復「八日之内」で帰天したとされるが、『大唐三蔵取経詩話』では「六月末旬」帰国、7月15日に定光仏の迎えを受け、天宮が降下させた「採蓮舡」で天堂にかえったとされる。

引き継がれ、花果山の位置も然るべき理由により変更が加えられたとみてよからう。

ひるがえって「神仏降孫」に見える花果山下に封じ込められる猴のイメージであるが、『太平広記』巻467に引かれる「李湯(出古岳瀆経)」の、禹によって「淮陰之亀山之足下」に桐柏山からうつされ淮渦の水神となった「状有如猿」の無支祁そのものであるから、猴行者から孫行者に移行する際、そこに無支祁のイメージが加わったことに疑問の余地はあるまい(『西遊記』雑劇の通天大聖孫行者は大姊が離山老母、二妹が巫枝祇聖母、大兄が斉天大聖、三弟が耍耍三郎といい、『清平山堂話本』の「陳巡檢梅嶺失妻記」の妖猿斉天大聖は長兄を通天大聖、次兄を弥天大聖、妹を泗州聖母といっている)。

それでは『西遊記』で水神のイメージが目立たなくなったのはなぜか。案ずるに、孫行者ならぬ孫悟空が玉帝に斉天大聖の称号を認めさせたからであろう。ではなぜ孫悟空は無支祁の持っていた水神のイメージを放棄させられることになったのか(『西遊記』で孫悟空は水が苦手だとたびたび告白している)。卑見によれば、それには既述した天水地それぞれを象徴する登場人物の死と再生を承け、その三者による三位一体の拡大地獄めぐり(と爾後の孤魂超度)を語るという構想の『西遊記』への導入が深く関わっていたはずである。江流の三蔵が水を、入冥した太宗が地を代表するなら、孫悟空に天を代表させるしかない。だから悟空は大いに天宮をさわがせねばならず、それには土地神が大暴れする、斉天大聖孫悟空の登場しない、後に『先天元始土地宝卷』となった土地神の物語はうってつけだったはずである。とはいえ土地神を孫悟空と言い換えただけでは天を代表させるには心もとない。そこで孫悟空に通天大聖でなく斉天大聖を名乗らせることにした。『水滸伝』の宋江に公明の字を新たに賦与することによりその属性を変えられた<sup>12)</sup>と同じことが、孫悟空にもおこなわれたのである。斉天の意味は、本来天に斉しい地の神の意味だったはずであるが、それは思惑通り早々に忘れられ、天の代表のトレード・マークになった、と。いずれにせよ先の構想が導入された時点で西遊記物語は『西遊記』として一応の完成をみたといえよう。だがそうした点については後述のこととして、淮渦の水神無支祁の影を揺曳する孫行者に、『先天元始土地宝卷』にみえる土地神の所業を与えてまで水との関わりを絶たせ(『西遊記』雑劇の孫行者は天宮をさわがせはしたが、八卦爐にも紅爐にも入っていない)、これに替わって水を象徴する物語となった【江流和尚】について、まずは語らなければならない。

### 三 【江流和尚】と魯府本

『大唐三蔵取経詩話』では西天からの帰路にあつて、定光仏から『心経』を授かった(「転至香林寺受心経本十六」)三蔵一行は河中府に至り、亭主の留守中にたびたび後妻に殺されかけ、あげく河に突き落とされて大魚に呑み込まれた先妻の子癡那を救った。卑見では、これこそが『西遊記』の【劉全進瓜】

12 拙論「瘟神の物語—宋江の字はなぜ公明なのか—」(『宋代の規範と習俗』所収、汲古書院、1995年10月)。

物語の原型なのであるが<sup>13</sup>、「到陝西王長者妻殺兒処弟(第十三(七))」の前半部分は<sup>14</sup>、基本的には無遮法会の際の奇瑞を語るものであって、「舜子至孝変文」を彷彿とさせる部分もあり、変文と語りの場を共通にする物語のひとつであったように思える。だが既述のごとく、孤魂超度の場面の排除こそが中国小説史の流れであってみれば、『西遊記』からこの部分が消えてゆくのは不可避であったろう。かくてトンプソンに【L111.2.1 舟(カゴ、やぶ)の中で発見された未来の英雄】と分類され、胡万川には【中国的江流児故事】と命名されたモチーフによる物語がこれに取って代ることになったのであろう。

胡万川によれば、彝族の「湫来児」の故事は1958年前後に収集整理されたものであるが、仏典に由来するものであって、原話は夙に呉の康僧会訳の『六度集経』巻3にみえるものであり、『大唐西域記』にもみえ、国王の愛妃が生子、他の妃により壺に入れ江中に投げられた卵から生まれた子が、母国を征伐し母子の対面を果たすというものであったという<sup>15</sup>。唐代伝奇には、江流児の要素を欠くため胡万川が言及しなかったとおぼしいこの故事の類話が複数存在する。『太平広記』巻122、121、128に見える「陳義郎(出乾瘦子)」「崔尉子(出原化記)」「李文敏(出聞奇録)」がそれである。いずれも父が殺された子が復讐を果たし、母や祖母と対面するというもので、後二者における殺人は江上でおこなわれていた。宋・劉斧の『青瑣高議』後集巻4所収の「卜起伝(従弟害起謀其妻)」もこれと同趣向のものであったが、元・周密の『齊東野語』巻8の「呉季謙改秩」では、生後数カ月の子が江に流され、僧にひろわれて養育されるようになっており、元・張国賓の雜劇『合汗衫』では、出産直後に子を黄河に流すとなったのみならず、死んだと思われていたが下流で救助され僧になっていた父と後に夫婦親子の再会を果たすとなっている<sup>16</sup>。こうなると【江流和尚】にみえる三蔵とその父陳光蓋の二重の死と再生の物語までもう一步といつてよかろう。それでは二人とも投江され死の淵までいった『合汗衫』の二重の死と再生の物語はいかにして構想されたのか。そもそも陳光蓋とはなにものなのか。

陳光蓋は三蔵法師の父として【江流和尚】の物語に登場してくるのだが、陳玄奘は陳留の人であって、『西遊記』のいう海州の人ではなかった。【江流和尚】の要諦は江流児が和尚になる点にあるのだが、『六度集経』に類するとして筆者が挙げた類話のうち、江流児が和尚となったのは「呉季謙改秩」のみであり、(僧となっていた)父と再会を果たすものも『合汗衫』のみであった。つまり【江流和尚】の三蔵法師に関する部分は、本来英雄の出生譚というべき

---

13 拙論「通天河はどこに通じていたのか—『西遊記』成立史の一齣—」(『埼玉大学紀要 教養学部』第38巻第2号、2003年3月)の「八 翠蓮宝巻—継子いじめの物語からの脱却—」で、それが【劉全進瓜】へと変化する経緯について論じている。

14 「到陝西王長者妻殺兒処第十七」にはもともと第十七と第十八からなっていたとの説や、前半は付加されたものかもしれないとの説がある。なお、ここでいう前半とは、詩が挿入される以前の部分を指している。

15 「中国的江流児故事」(『真実与想像—神話伝説探微(胡万川文集①)』所収、里仁書局、2010年10月)による。原載は『漢学研究』第8巻第1期、1990年6月。

16 拙論「王府と原小説—江流和尚の物語から「西遊記」を考える—」(『埼玉大学紀要 教養学部』第29巻、1994年3月)で詳しく論じた。

ものであったのであり、陳光蕊に関する部分こそが本来の死と再生の物語だったのである。両者は「投江」を共通要素とし、たまたま主役の姓がともに陳であったことで融合したのではあるまいか。既述の「陳義郎」の主人公の姓もまた陳であった。それでは陳光蕊の死と再生の物語はどこからきたのか。

陳光蕊の死と再生の物語のみならず、【江流和尚】そのものといってよい民間故事が林蘭により紹介されている。『金田鶏』<sup>17</sup>所収の「三官老爺的故事」の第一話の前半がそれである。この民間故事についてはかつて論じたことがあるのだが、以下に再度その部分のあらすじを紹介したい。

数百年前、雲台山は四面を大海でかこまれていた。その凌州山に陳光蕊という富人が住んでいた。病気になった妻（陳娘々）のために買った鯉が涙を流すのを見た光蕊は、うろこ三枚でスープをつくただけでこれを逃がしてやった。後日光蕊は南方へ赴任のため妻と牛(劉)洪の船に乗った。水賊牛洪は前頂の九龍橋下で光蕊を狂浪のなかに突き落とし、妊娠中だった陳娘々に結婚を逼り、光蕊になりかわって赴任した。牛洪が生まれたばかりの男の子を殺すことをおそれた陳娘々は、その子を木桶に載せ、血書をもたせて長江に流した。男の子は金山寺の老和尚にひろわれ、湍僧と名付けられた。生長して自身の生い立ちを知った湍僧は、過去未来を知る能力をもつ先の老和尚の指示によりまず母を訪ね、これと名乗りをあげたのち凌州雲台山に父を訪ねた。光蕊は自分を恩人とよぶ少年に水晶宮に導かれ、そこで気ままにくらしていたのだが、そこでのくらしにあき、龍王三太子の指示のまま、龍王から小匳盒をもらって雲台山に帰っていたのである。なにある先少年こそかつて鯉に化けていた龍王三太子であって、三太子が龍王から土産にもらうよう指示した盒中の三盆花は龍王の三人の公主だったのである。三公主は光蕊の妻となり、それぞれ男の子を生んでいた。光蕊はたずねてきた湍僧とともに皇帝に上奏して牛洪を捕らえ、陳娘々を含む一家九人は凌州にもどって幸せにくらした。

出家の湍僧はその後まもなく雲台山を離れて雲遊の旅に出た。三人の公主が生んだ三人の息子は、龍王の外孫ということで姜子牙によって三官老爺に封神されることになった。その際、大哥に偵察に派遣された三弟がまず真ん中の天官の席にすわってしまい、二弟も水官の席についてしまったため、大哥には地官の席しかなくなってしまった。それを憤っているため、前頂の三元宮の地官の眼はいまも赤いのである。

公主の生んだ三兄弟が姜子牙に封神されるなら、その腹違いの兄を三蔵とするわけにはゆかなかつたであろうが、金山寺で老僧に拾われ湍僧(唐僧と同音。ただし声調は異なる)とよばれている以上、これと【江流和尚】の三蔵法師に関する部分が無関係のはずはない。詳細な論証過程については拙論<sup>18</sup>を参照していただくこととして、以下では以後の見解も交え、簡潔に現在筆者の考えて

17『民間趣事童話伝説』の一、上海北新書局、1929年。

18 前掲註16の拙論の「七 三官大帝の物語」「八 雲台山と物語」「九 護国三元宮海寧禪寺と魯府」「十 魯府と「江流和尚の物語」」を見られたい。

いるところを述べておくことにしたい。

「三官老爺的故事」の残る部分は、後に上元一品九氣天官紫微大帝、中元二品七氣地官清虛大帝、下元三品五氣水官洞陰大帝に封ぜられる三官大帝の出世譚となっている。三官大帝は七巻本の『三教源流搜神大全』の「三元大帝」でも陳子椿(椿)と龍王の三公主の子とされていた(元刊とされる『新編連相搜神広記』の「三元大帝」にはそうした記述はない)。『雲台山志』などの関連する文献の記載を総合すると、万暦以前から雲台山周辺では陳子春の塚を証左とする、陳光蓋字子春(椿)が龍王の三人の公主を得て三元大帝を儲ける物語が語られていたことがわかる。それが(連雲港市郊外の、康熙49年以前は島であり、花果山のモデルとされる)雲台山と同様、長江中の島であった金山に伝わる江流児故事と融合した<sup>19</sup>。否、江流児故事は、陳光蓋の死と再生の物語の存在を承け、ある時期に陳光蓋を父とし、江流児を俗姓が陳である玄奘三蔵とするものに生まれ変わったらしい。世本は本来陳光蓋の子とされていた三官大帝の存在を【江流和尚】の本文を削除することによりきれいに消し去ったものであり、「三官老爺的故事」は両者を併存させたものであって、現存する宗教口承文芸のなかにはこれと同様なものがある、と。以上に述べた三蔵を主人公とする江流児故事の成立過程が正鵠を射たものであるなら、【世徳堂本西遊記】の【江流和尚】には三官大帝が登場しており、それを不都合とみた世徳堂が【江流和尚】全体を削除したというシナリオも考えられるかもしれない。

その場合、次に考えるべきは『西遊記』の作者の呼び声の高い呉承恩がその成立に関わった、との説もある魯王府本『西遊記』に江流児故事が存在していたかであろう。

太田辰夫は、世本の陳元之序に「西遊一書不知其何人所為、或曰出今天潢何侯王之國、或曰出八公之徒、或曰出王自製」とあり、周弘祖の『古今書刻』の山東・魯府に「西遊記」とあることに拠り、『西遊記』は「天潢」、すなわち明の宗室の「何侯王」の「八公」、なんとかいう侯王即魯王の賓客の手になったものであるとみとうえで、世本の陳序を転載した楊閔齋本が「出今天潢何侯王之國」の「今」の文字を省き、序末の「時壬辰夏端四日也」の壬辰(万暦20年)を癸卯(同31年)に改めていることを根拠に、世本のいう「何侯王」は万暦22年に薨じた恭王朱頤坦であって、島田翰が『古今旧書考』の成立を「その成れるはけだし隆万の際にあるか」と推したのを根拠に、「魯府本西遊記はお

---

19 澤田瑞穂「唐三蔵の出生説話」(『仏教と中国文学』所収、国書刊行会、1975年5月。原題は「唐三蔵の出生説話について」)。『福井博士頌寿記念東洋思想論集』所収、国書刊行会、1960年11月)は、永楽2年に南京の鶏鳴寺で示寂した別峰長在禪師は俗姓を陳といい、水中から拾われて僧となり、のちに金山寺の住職となったこともあり、「貴子漂着説話が金山寺に定着して伝説化し、さらに発展して玄奘三蔵に附会されるには、この長在禪師の話が有力な触媒をなした」とする。これに対し磯部彰『『西遊記』形成史の研究』(創文社、1993年2月)は、「こと長在禪師経由に関しては、元の呉昌齡撰「唐三蔵西天取経」劇には、すでに江流物語が具備されているため、それは明白な誤りであると言える」と述べているが、磯部のいう呉昌齡撰「唐三蔵西天取経」は『楊東来先生批評西遊記』のこととおぼしく、それは孫楷第により明初の楊景賢の作品と証されているから、明白な誤りとするには及ばない。だから当時すでに江流和尚のモチーフを語る場合には俗姓を陳とする僧が主人公に選ばれる(あるいは主人公の俗姓を陳とする)ことになっていたとみることは十分可能であろう。

そくとも隆慶(大塚：1567-72)年間には刊行されたと推測される」とした<sup>20</sup>。

ところが『古今書刻』著録の「西遊記」が小説の『西遊記』であったかはさだかだけでなく、同時代の方志や書目に「西遊記」を著録するものはほかにもあったし(いずれもその内容については言及されない)、「西遊記」をその名のもとに著録する『淮安府志』の「呉承恩」には魯府との接点はみあたらず、逆に荊王府の紀善となっていたから、諸説いりみだれ甲論乙駁の様相を呈することになった。

筆者は『西遊記』の作者(というより最終編者というべきか)が誰かにはこだわらない立場であって、世本に先行する『西遊記』が刊行されていたことが明らかであればそれでよく、その刊行者が魯府であっても、『古今書刻』で魯府に引き続き「西遊記」を著録する登州府であっても、はたまた世徳堂であってもさしつかえないと考えているが、【江流和尚】との関係を考えるとき、諸説のなかでは魯府本に親近感を覚えるものである。よって以下ではその立場で論を続けることにしている。

ひるがえって、魯府本が存在していたのなら、そこに三官大帝は登場していたのか。登場していたとすれば、魯府本と筆者のいう【世徳堂本西遊記】との関係が問題になってこよう。世本とほぼ同内容の【江流和尚】が『西遊記』雜劇に存在し、父陳萼字光蓋を「淮陰海州弘農人」、母を殷開山の娘とする以上、そこでは所在地が示されない花果山も、海州の雲台山に引き寄せられつつあったに相違ない<sup>21</sup>。海州は魯王府が置かれていた兗州に近い。諸般勘案するに、魯府本はもとより、おそらく【世徳堂本西遊記】にも三官大帝の登場する【江流和尚】が存在したはずだと筆者は考えている。この場合には魯府本と【世徳堂本西遊記】をあえて分けて考える必要はなくなるはずである。

筆者は現在空想を逞しくし、以下のように考えている。世徳堂は魯府の依頼により【大鬧天宮】や【西天取経】を中心に大幅な増補を加えた魯府本『西遊記』を刊行(もしくは版木の作成を)したのだが、後に三官大帝に言及する【江流和尚】部分を削除した修正版を作成刊行した。現存する世本はこの修正版であり、初版の【世徳堂本西遊記】は失われてしまった(もしくは刊行されることがなかった)。そこでは赤子の三蔵が金山ではなく雲台山に漂着することになっていた可能性さえあろう。だが南京の書肆である世徳堂には、それではあまりに従来の西遊記物語からはずれていると思えた。それが修正版刊行の所以である、と。もちろん世本以前に福建で上図下文の【世徳堂本西遊記】が刊行されていたことも考えられなくはないが、その福建刊本が三官大帝に言及していたとは思えない。にもかかわらず世徳堂が【江流和尚】を削除したのなら、既述した【西天取経】における難の増設にともなう趣向の流用を糊塗することが目的だったということになるろう。いずれにせよ清本で【江流和尚】の物語は復活した。【江流和尚】をまるごと削除してしまうと三蔵の江流児故事や陳光蓋の死と再生の物語まで失われてしまう。それでは本末転倒だし三位一体にもならない(そもそも三位一体の構想が意識されるようになったことと三官大帝

20『西遊記の研究』(研文出版、1984年6月)の「十二 世徳堂本西遊記(世本)考」。

21『小方壺齋輿地叢鈔』所収の姚陶の「雲台山記」によれば、そこでは雲台山を殷開山の故里、陳状元光蓋をその婿とし、生まれた三子は三元となったという「世俗相伝之説」が語られていたという。

をその子とする陳光蓋の死と再生の物語の西遊記物語への導入とは無関係ではなかったはずである)。こうした考えのもと、【世徳堂本西遊記】の【江流和尚】から三官大帝関係部分を削除し、他の部分と合わせて修正して復活させたもの、それが清代の『西遊記』諸本だということになるのではあるまいか。

最後に、既述の「三官老爺的故事」につき、筆者の考えるその原話の様相とその後の変化の経緯を、推測を交えて述べておきたい。陳光蓋がうろこ三枚でスープをつくったのみで逃がした鯉を「三官老爺的故事」は龍王三太子とする。これに対し、筆者は、鯉は龍王自身であって、三枚のうろこのスープを飲んだ陳娘々は妊娠し、三人の子を生んだ。それが後に三官大帝となったと考えている。だがこの展開はとうてい士大夫階級の受け入れるところとはならなかった。そこで陳光蓋の子として三官大帝を生む三公主が案出された。かくて陳娘々には玄奘の母となる余地が生じた。とはいえ、うろこのスープの話はこの物語の中核であったため、省略できない。幸いなことに、唐代の「湍来児」の類話には祖母が登場するものがあつた。そこでスープを飲む役割は祖母に肩代わりさせることにした。かくて「三官老爺的故事」の原話と江流児故事が融合する余地が生まれた、と。

#### 四 【唐太宗入冥】と南通の童子戯

【唐太宗入冥】は唐の太宗の死と再生の物語であるが、入冥の原因となった涇河の龍に関わる部分や太宗が閻王と交わした南瓜を贈るとの約束、再生のために転輪蔵を経た際の経緯により崔判官に求められた、水陸大会をおこない枉死者の救済をすとの誓いに関わる部分の比重が大きい。実のところ、『西遊記』の本体にあたる【西天取経】もこの水陸大会を果たすためとされていた。【西天取経】については後述に譲ることとして、ここでは太宗の入冥ならびにその前後を語る部分について論ずることにしたい。

当然といえば当然であるが、このうち最も古く文献にその跡をたどることのできるものは太宗が死して後に蘇ったとする物語であつた。唐の太宗の死と再生の物語は唐・張鷟の『朝野僉載』巻6（『太平広記』巻146「授判冥人官」）にみえており、「唐太宗入冥記」と擬題される敦煌写本（斯2630）も現存している。「唐太宗入冥記」は残缺が甚だしいが、太宗が死後判官崔子玉のはからいで十年の延命を得て再生するというもので、崔子玉と『西遊記』の崔瑤は姓も一致しているから、同じ物語が長期に互って語られていたことは明らかである。『朝野僉載』で太宗は冥官に「六月四日事」を聞かれた。その日は太宗が兄で皇太子の建成と弟の元吉の先手をうちこれを肅清した日であつた。「唐太宗入冥記」は唐の滅亡後に語られていたものであろうから、明確に建成、元吉の求めにより冥府が太宗を召喚した（ために太宗は死んだ）としている。『西遊記』でも建成、元吉は登場するが、太宗の召喚を閻王に求めたのはあくまで涇河の龍王であつて、二人は太宗をみかけ（或いは待ち受け）て「揪打索命」したとされる。『永樂大典』巻13139に引かれる「(魏徵)夢斬涇河龍」は太宗が涇河の龍の助命依頼を果たせなかったことを嘆くところで終わっており、引き続きはずの冥府に召喚されるくぐりは存在していない。おそらく削除された

のであろう。かつて筆者はこの点につき詳しく論じたことがあるのだが<sup>22</sup>、以下でも、新たに考えた部分を加え、整理して再度提示しておくことにしたい。

『永楽大典』の編纂を命じた明の成祖朱棣はもとの諡を太宗といった。朱棣は太祖の四男であったが、早世した兄の皇太子の息子朱允炆が皇太孫として太祖朱元璋の死後帝位に就くや、君側の奸を除くと称して討伐軍を起し、首都の南京を陥落させた。混乱の最中、朱允炆は行方不明となり、その年号建文は取り消され、朱棣が二代目の皇帝として即位した。歴代の二代目の皇帝は太宗と諡を贈られる場合が多く、朱棣の場合もそうであった。唐の太宗李世民の血塗られた即位、ならびに宋の太宗の曖昧な即位の経緯<sup>23</sup>を連想させるこの諡は、甥の朱允炆を退け即位した薄暗い過去を持つ朱棣にはうとましいものであった。朱棣がそれを気に病んでいると知ったその周辺の人物が、当時の西遊記物語にあってすでに欠かせぬ要素となっていた唐太宗入冥の物語を『永楽大典』に取り上げ、入冥の原因を兄弟殺しから涇河の龍の逆恨みに公式に改め、入冥以後の部分削除させた。『永楽大典』は勅撰の書であったから、朱棣の目にとまることを期待ないしは懼れたのかもしれない(朱棣が直接指示したことも考えられる)。ちなみに朱棣の諡は後の嘉靖17年に成祖と改められている。

では建成、元吉にかわって涇河の龍王が選ばれたのはなぜか。龍はいうまでもなく皇帝の象徴であり、涇河が洪水を頻繁に起こす暴れ川であったからであろう。涇河とその周辺は古来多数の龍神が棲息する、龍神のさきわう地と意識されていたうえ、その龍神たちは例外なく殺されることになっていた<sup>24</sup>。水神の龍を退治することは治水を意味する。『西遊記』で涇河の龍王は天条に違反したとして斬首されるのであるが、その実、雨の降る地域と雨量を勝手にかえたため、洪水と旱魃を引き起こしてしまったからであった。

閑話休題、蘇った太宗は冥土での借金を相良に返済しようとするが辞退されたため、替わって大相国寺を建立し、門口に出て齋僧に自身の金釵を喜捨した妻の李翠蓮を咎めて自縊され、自暴自棄になって冥土への道行きに志願した劉全に托して閻王に南瓜を届けさせる。かくて三つの誓いのうち二つまでは果たされたのであるが、水陸大会には観音菩薩の横槍が入った。大乘経でなければ「度不得亡者昇天」というわけである。かくて三蔵の西天取経となるのだが、それについては後述に譲ろう。

李翠蓮が金釵を喜捨する僧の素性につき、『西遊記』は何も語らない。だがこれを西天取経の帰途にあった三蔵とするものがある。曹琳が『江蘇南通童子祭祀儀式劇本』に蒐集し校注した「劉全進瓜」がそれである<sup>25</sup>。この「劉全進瓜」は通州市西安郷陳張鈴手抄本を翻字したものというが、そこで翠蓮に喜捨を求める僧は「西方来的唐和尚、連人帶馬五個人」といつているから、取経を終え帰国の途にあった三蔵(一行)に相違ない。

22 拙論「斬首龍の物語」(『埼玉大学紀要 教養学部』第31巻第1号、1995年9月)を参照されたい。

23 拙論「天書と泰山—『宣和遺事』よりみる『水滸伝』成立の謎—」(『東洋文化研究所紀要』第140冊、2000年12月)で詳しく論じた。

24 この点については拙論「龍神から水仙へ—涇河幻想—」(埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』創刊号、2004年3月)を参照されたい。

25 『民俗曲芸叢書』第76冊、財団法人施合鄭民俗文化基金会、2000年6月。

童子戯は江蘇省の南通周辺で現在も行われている儼戯の一種であるが、『西遊記』に関わる演目が多数あり、魯王府がある兗州や雲台山のある海州<sup>26</sup>に近いこともあって近年注目されているものであって、童子が私有する抄本の童子戯のテキストの蒐集整理が現在も進められている。曹琳による収集はその早い時期のものであるが<sup>27</sup>、朱恒夫・黄文虎によってもおこなわれ、その成果が『江淮神書』<sup>28</sup>にまとめられた。その〈劉全進瓜〉は「癸酉(1993)年全月吉立」の「竹林堂 阮兆雲主人用記」による抄本であるが、そこではなんと三蔵が観音菩薩の夢中の指示により、強引に翠蓮から金釵の喜捨を求め、それをわざわざ劉全の店に質入れにゆくととなっている。すべてが劉全に南瓜を冥府に届けさせ、翠蓮を太宗の御妹の身体を借りて還魂させるための、手の込んだ観音菩薩のやらせだったというわけである。

童子戯のテキストはほぼすべて童子個人所有の抄本であり、その一部は文革後に記憶に頼って写定されたものであったから、テキスト相互の相違が少なくないようであり、それを蒐集する者も相違の多いものに着目して蒐集したとおぼしいから、翻字された内容が多数派のものかはさだかでない。そのような状況下ではあったが、筆者はかつて曹琳蒐集になる童子戯の〈劉全進瓜〉と〈西遊記唐僧取経〉については【西天取経】との関係において、〈鄭三郎成仏伝本〉については涇河の龍ならびに猪八戒との関係で論じた<sup>29</sup>ことがある（その時点では後述する朱黄本は出版されていなかった）。一方、童子戯のテキストは 1920年代に上海に出た南通人の経営する書肆から 120 種ほど石印で出版されており、それが台北の中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館に「石印鼓詞」として一括所蔵されている。筆者はかつてその全体<sup>30</sup>、ならびに個々の「石印鼓詞」について簡潔に紹介した<sup>31</sup>ことがある。その『劉全進瓜』(8-142)でも、金釵の喜捨を求める僧は唐僧となっていた。しからば南通の童子戯の〈劉全進瓜〉ではすべて三蔵が西天取経の帰途に李翠蓮に金釵の喜捨を求めるとなっていたとみてよからう。

ちなみに、南通の童子戯が〈劉全進瓜〉を〈西遊記唐僧取経〉に続けて演ずるかたちをとるのは、童子の祭祀儀礼が枉死者のみならず吊死鬼の救済をも目指すものであったことを示し、翠蓮に金釵の喜捨を求める僧を唐僧としていたのは、そのもとづく西遊記物語では【劉全進瓜】が【西天取経】に引き続いて語られていたことを示している。ひるがえって、吊死鬼を救済するには吊死鬼が存在していなければならない。自縊するための理由も必要である。翠蓮自縊の直

26 朱秋華の「海州童子戯の儼戯及其他」(『民俗曲芸』第 113 号、1998 年 5 月)を参照のこと。童子と童子は同じものの異表記である。

27 より早期の蒐集に『十三部半巫書』(南通市民間文学集成弁公室・南通市民間文芸家協会、1995 年)がある。

28 上海世紀出版股份有限公司・上海古籍出版社、2011 年 6 月。

29 註 13 の拙論ならびに拙論「涇河の龍は何に転生したのか」(『埼玉大学紀要 教養学部』第 43 巻第 1 号、2007 年 9 月)を参照されたい。

30 「中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館所蔵の「石印鼓詞」－「石印鼓詞」と「童子戯」－」(『饜饕』第 8 号、2000 年 9 月)。

31 「石印鼓詞研究(其一)」～「石印鼓詞研究(其三)」(『埼玉大学紀要 教養学部』第 35 巻第 1 号、第 2 号、第 36 巻第 1 号、1999 年 9 月、2000 年 3 月、9 月)。なお註 30 の拙論の「石印鼓詞」及び「童子戯」対照一覧表を参照されたい。

接の原因は「齋僧金釵」にともなう劉全の打擲であるが、その発端は閻王の南瓜の求めにあった。進瓜のためには冥府にゆかねばならず、ゆく者にはそれなりの理由、覚悟が必要であった。こうした条件を満たした者が、妻翠蓮を自縊させ、内心忸怩たる思いを抱く劉全であった。結句劉全は生き返り、翠蓮は御妹の身体を借りて復活することとなった。【劉全進瓜】が『西遊記』に組み込まれていることは、『西遊記』が目連戯などの鎮魂演劇と同根に根ざすものであることを示す証左とみてまず間違いあるまい。案ずるに、翠蓮の「昇天」ならぬ還魂復活は、祭祀儀礼からの脱却、言い換えれば祭祀儀礼から小説を含む芸能への変容の第一歩に相違ない。

『西遊記』の【劉全進瓜】と童子戯の(劉全進瓜)の相違は、喜捨を求める僧を唐僧とするか否かだけではない。既述のごとく、それが西遊記物語の流れのなかに置かれている位置も異なっていた。卑見によれば、この二つの相違の間には密接な関係があることになる。『西遊記』の三蔵一行は、通天河で第 81 難を果たすため放り出されはしたが、基本的に雲に乗って靈山と長安を往復した。だから(劉全進瓜)で劉全と翠蓮の家があるとされる、長安近辺の蘆林村(或いは華陰月徳県)であっても、金釵の喜捨を求めに劉全の屋敷に立ち寄りとするには無理があった。思うに三蔵一行の帰国が空路でと変わった時点で【劉全進瓜】を帰途に置くことが不可能になり、往路の出発以前に移されたのではなかったか<sup>32</sup>。これと同様、帰路の消滅にともないおかれる位置が変更されたエピソードに、『大唐三蔵取経詩話』の「転至香林寺受心経本十六」にみえる、定光仏から心経を授けられる段が世本では第 19 回の「収八戒」の直後に烏巢禪師から摩訶般若波羅蜜多心経を授けられるとかかわって移されていることがあげられよう。この部分、後述する曹琳本の(西遊記唐僧取経)では、帰路の通天河において、依頼していた如来への質問を三蔵一行が失念していたことを知った鼈がいきなり通天河に潜ってしまい濡れてしまった経文を、河畔の樹にかけ乾かしていたおり、狂風によって一部の経文が失われた。それを悲しんでいた三蔵に、空中を通りかかった烏婁禪師が「和尚你放心、刮去宝経不要緊、与你草経繳旨文」と慰め、「造経交付把投唐僧」したとなっていた。

ひるがえって、閻王はなぜ南瓜を求めたのか。曹琳本の(西遊記唐僧取経)は、如来から経文を得たのち、靈山の前後で遊んだ悟空がふもとにきた時に見つけた青藤に黄色い花をつけているのが西瓜だったとするのみで、南瓜についての言及はないのだが、朱黄本の(唐僧取経)では、経文を受け取った後にやってきた花園にとりどりの瓜があり、「東西瓜南北瓜香瓜瓠子、茄子花紫薇花有葉無根。弯的是二燒瓜弯弓箭箭、黄的是二黄瓜架上牽藤。孫猴子在西天没有飯吃、肚内飢口里渴瓜当点心。孫猴子快快的再摘一個、黒子兒紅瓠子賽過糖精。冬瓜種西瓜種帶了回去、南瓜種北瓜種帶上東京。…各色瓜在西天花園之内、唐三蔵都把他帶回東京」となっていて、もともととも中国になかった各種の瓜を三蔵が持ち帰ったとしている。それなら帰国後に【劉全進瓜】が置かれる方が妥当に思える。しからば【劉全進瓜】は『大唐三蔵取経詩話』以後に形をなしたばかりの西遊記物語では帰路の帰国直前に置かれ、なおかつ閻王の要求も中国にない南瓜を印度から持ってきてほしいというものであった可能性がでてこよ

32 筆者はかつて註 13 の拙論で「到着直前から出発以前へ—「劉全進瓜」の旅—」としてこの点を論じたことがある。

う。ちなみに世本第 10 回では十王が太宗に「我処頗有東瓜西瓜，只少南瓜」といつていた。

## 五 【西天取経】の第一・四半分—あわせて『礼節伝簿』などについて

【西天取経】は三蔵（一行）が経なければならぬ諸難について語る部分であるが、その大半はそれぞれ独立しており<sup>33</sup>、全体として連環体小説の形態をとっていたから、順序を入れ替える事は容易だったはずだし、新たな趣向を加えたり、難自体を新設したり削除したりすることも可能であったろう。とはいえ西遊記物語の成長過程全体を見渡すに、そうした修正、追加、削除（以下ではまとめて【修正】と称することにする）は随時おこなわれたとおぼしく、特定の人物によりある時期に集中しておこなわれたとは思えない。【西天取経】における諸難は、異なる時期に複数の人物のそれぞれの【構想】（といっておく）により【修正】がなされたものの総体というべきものであろう。そうした【修正】のなかには特定の難についてのみおこなわれたものもあったろうが、多くの場合、複数の難にまたがって、統一的な【構想】のもとになされたように思われる。それなら、そうした、【構想】が見え隠れする諸難に限っては、同一時期の同一人物による【修正】とみなしてもよいのかもしれない。とはいえそうした【修正】もたびたびおこなわれたであろうから（別の人物による再【修正】が加えられた可能性があるということ）、当初の【構想】はみえにくくなっているかもしれないが、その痕跡すら見えなくなっているわけではないであろう。以下では世本を中心に、そうした蛛絲馬迹の痕跡を探り、【西天取経】の成長の過程を辿ってみることにしたい。

【西天取経】のプロモーターは観音菩薩である。如来の命を受けた観音は西天取経の経路を下見し、五百年前天宮をさわがせて以来五行山（両界山）下に封じ込められていた孫悟空や、妖怪となっていたかつて天蓬元帥だった猪八戒、捲簾大将だった沙悟浄、同じく罪を犯し間もなく死罪となるはずの西海龍王の三太子をやがて来る取経僧の弟子になるよう諭し、そのうえで長安にゆき、太宗に「上西天拝仏求経」を發議させ、三蔵がそれに応ずるよう仕向けた。

世本のいう九九八十一難は、三蔵未生の時期の第 1 難(金蟬遭貶)や【江流和尚】時期の第 2 から第 4 難を除けばすべてで七十七難となるが<sup>34</sup>、そのなかで節目となる難として筆者が注目しているのは五莊觀、通天河、老君青牛、獅駝国と再度の通天河（仮に老龜作崇とよぶ）の難である。このうち、通天河は西天までのちょうど半ばにあたるとされ、最後にはそこに観音菩薩が魚籃観音のお姿を現している。通天河の何たるかについては後述するが、そこまでのさらに半分、いわば西天取経の旅の第一・四半分の最後に位置付けられているのが

33 このスタイルをとる小説は英雄の遍歴物語を語る近世以前の小説に多い。中国の文言小説でいえば『古鏡記』、西洋でいえば『オデッセイ』や『ラーサリーヨ・デ・トルメスの生涯』などがそれである。

34 そもそも八十一難は数合わせであって、実際の難の数はもっと少ない。論を進める便宜のため、以下の本文では一連の難についてはまとめて略称で示した。附録とした「世徳堂本・朱鼎臣本・楊致和本【西天取経】並びに曹琳本・朱黄本(唐僧取経)比較対照表」の略称がそれである。

鎮元大仙の「五莊観」である。

第一・四半分の「五莊観」までにあつては、黄風怪の難を除き、観音は出ずっぱりであつた。三人の弟子と龍馬に関わる難に登場するのは当然としても、黒熊精の黒風怪を収伏すべく自ら出向き、黎山老母や普賢、文殊の両菩薩を引っ張り出して一行の道心を確認、最後には悟空が根絶やしにした人參果の樹を生き返らせるべく五莊観におもむき、三蔵一行らと鎮元大仙の催した人參果会に参加する。『西遊記』雑劇や『朴通辞諺解』に黒熊精や黄風怪への言及があるから、黄風怪も早期の西遊記物語に加わっていたことは明らかである。

ひるがえって「五莊観」であるが、この難を論ずるに際しては、先んじて『迎神賽社礼節伝簿四十曲宮調（以下では『礼節伝簿』と略称する）』につき紹介、検討しておかなければならない。『礼節伝簿』は山西省潞城県崇道郷南舎村の堪輿家(陰陽先生)曹占標の家で発見された、封面に「万歴(曆)二年正月十三日抄立 選採堂 曹国宰誌」と記される抄本であるが、問題となるのはその「樂舞唾隊戯角色排場単二十五個」と仮題される第四部分に収められる「唐僧西天取经一単 舞」ならびに「文殊菩薩降獅子一単 舞」と、第三部分「二十八宿值日開後」の亢金龍の第六盞に見える「雄(熊)精倒(盜)宝」、牛金牛の第四盞に見える「雄(熊)精到(盜)宝」である(なお「唐僧西天取经一単 舞」の直前に「涇河龍王難神課先生一単 舞」がみえるが、【西天取经】と関わらないし、そもそもこの時点の『西遊記』に組み込まれていたかさだかでないため、これについては本論では論じない)。以下に『中華戯曲』第3輯(山西人民出版社、1987年4月)所収のその影印本により、まず「唐僧西天取经一単 舞」を翻字し、私見により誤字、断句を修正したうえ、それにより当時の【西天取经】に存在したと推定できる難名を〔 〕内に記しておくことにした。とはいえそこに世本では登場しない(あるいは名称が変更されている)キャストが登場している可能性があるため、誤字、脱字とは一概には決め難いものもあるうえ、難の順序が異なっていたりもする。それゆえよく読めない部分も存在する。寒声・栗守田・原双喜・常之坦による同書所収の翻字註釈稿は字を補ったり改めたりしてそれを読めるようにしているが、筆者はそれについてはなるべく謹慎し、下線を附してその箇所を示すにとどめた。なお末尾の神仏名を列記している部分についてはこれを省き、重複(おそらく書き損じ)と思われる部分については削除線を引いてそれを示しておくことにした。

唐太宗駕、唐十宰相；唐僧領孫悟空(空)〔収悟空〕、朱(猪)悟能〔収八戒〕、沙悟淨〔収悟淨〕、白馬〔収龍馬〕；行至師陀国；黒熊精盜錦蘭(欄)袈紗(娑)〔黒熊〕；~~八百里~~黄風大王、靈吉菩薩、飛龍柱杖〔以上黄風怪〕；前到宝象国、黄袍郎君、綉花公主〔以上黄風怪〕；銷(鎮)元大仙献人參果〔五莊観〕；蜘蛛精〔蜘蛛〕；~~地勇(湧)夫人~~；夕用(多目)妖怪一百隻眼、天(万)波降金光霞佩〔以上蜈蚣〕、観音菩薩、木叉行者、孩兒妖精〔以上紅孩兒〕；到車似(遲)国、天(大)仙〔以上車遲国〕；李天王、哪吒太子降地勇(湧)、六丁六甲將軍〔以上地湧夫人〕；到烏鷄(雞)国、文殊菩薩降獅子精〔以上烏雞国〕；八百里、小羅女鉄扇子、山神、牛魔王〔以上火焰山〕；万歳宮(聖公)主、胡王宮(公)主、九頭附(駙)馬、夜叉〔以上九頭鳥〕；到女兒国〔女人国〕、蝎子精、昴日兔(雞)下降〔以上蝎子精〕；観音張伏兎起僧伽帽頻波(貧婆)国、西番太子、降龍伏虎、到西天雷音寺... (以下略)

もうひとつの「文殊菩薩降獅子一単舞」は、「唐僧西天取経一単舞」の「文殊菩薩降獅子精」を単独で実施するものごとくであって、以下のように記載されている。

散花隊(童)子、護法善神、獅子精、積善太子、禪院寺長老、孫行者、猪八戒、唐僧、沙和尚、文殊。上、散。

これによれば、【西天取経】の第一・四半分の難は、「四聖」を除き、この時点で出揃っており、その掉尾を飾る「五莊觀」も備わっていたことがわかる(孫悟空が登場する以上、「劉伯欽」が存在しなかったはずはない)。「師陀国」については世本の寅將軍、熊山君、特處士が登場する双叉嶺の「寅將軍」が本来それであったのだが、この時点(万暦2年)以降に新たに創作された。同じく三妖怪が登場させる、第三・四半分の掉尾に置かれた獅駝嶺ならびに獅駝国に名を奪われ、あたかも「劉伯欽」の双叉嶺の一部のような扱いになったとおぼしい(当然『礼節伝簿』に「獅駝国」は存在していない)。おそらく同じく黒熊が登場する「黒熊」と熊山君の近接を嫌い、なおかつ大規模で多くの神仏が登場する難を新設しようとしたためであったろうか。ちなみに「四聖」の不在については、聖僧の道心を試すのは『礼節伝簿』にふさわしからずとして省かれ、「黄袍怪」の移動については「黄風怪」と近接を嫌ったとみておきたい。なお、よく読めないとした「観音張伏兒起僧伽帽頻波(貧婆)国」であるが、『西遊記』雑劇の巻6第21齣「貧婆心印」との関係が考えらなくもない。その場合『礼節伝簿』の「唐僧西天取経」の依拠した原『西遊記』と『西遊記』雑劇の間になんらかの関係があったことになるのであるが、具体的には不明なため、待考としたい(原『西遊記』については後述)。

では『礼節伝簿』の「唐僧西天取経」が依拠した原『西遊記』の成立はいつごろまで遡れるものなのであろうか。それを論ずるについては、『迎神賽社祭祀文範及供盞曲目(仮題。以下では『曲目文範』と略称する)』と『唐楽星図(仮題)』について紹介、検討しておかなければならない。

『曲目文範』は、『礼節伝簿』を発見した曹占標とその子学良が1989年春に新たに発見した、『礼節伝簿』と同じく迎神賽社用の抄本である。封面はすでに失われていたが、本文中に「道光某年」とあることにより、清の道光ころの抄本とみなされており、翻字註釈稿が『中華戯曲』第11輯(山西人民出版社、1991年12月)に寒声・栗守田・原双喜によって発表されている。『曲目文範』にも『礼節伝簿』の「二十八宿値日開後」に相当する「二十八宿星値日」が収められているのであるが、『礼節伝簿』の「唐僧西天取経」を含む「(唾)隊戯」はまったくみあたらない。多数の演員を必要とする隊戯が衰退し、実施されなくなっていたためと思われる。

『唐楽星図』は潞城県近隣の長子県東大関村の堪輿家牛希賢の家で発見された抄本であるといい、その李天生による校注本「《唐楽星図》校注」の当初『戯友』1990年増刊に発表されたもの(筆者未見)の修改本が『中華戯曲』第13輯(山西古籍出版社、1993年8月)に収められている(堪輿家は楽戸による祭祀儀式のプロモーターであった)。同時に蒐集された史料はすべてで14種あったが、校注本が発表されたのは、その「頭場楽次」「三場楽次」「三場食次」にみえ

る「大清嘉慶二十三年歲次戊寅」に拠り、清・嘉慶 23 年の抄本とされる『唐樂星図聴命文』のみであり、同じく『中華戯曲』第 13 輯所収の廖奔の「晋東南祭神儀式抄本的戯曲史料価値」に拠れば、ほかの史料は希賢の弟小五のもののように、残本だったりしたため、『唐樂星図聴命文』の校定資料扱いとなったようである（ゆえに以下では、以上の実体を反映すべく、『唐樂星図』ではなく『唐樂星図聴命文』とよぶことにする）。

この全 14 種の抄本の多くには抄写時期を示す紀年がみえ、それらは民国 14 年 6 月 10 日の『賽上雑用神前本』以外、「雍正四年」から「同治十〇年」の間に納まっているらしいのだが、ひとつだけ明の年号がみえるものがあった。残本ゆえか、図巻ゆえか不明ながら、翻字されなかった『唐樂星行早七晩八図巻』がそれであって、そこには「維大明嘉靖元(1522)年ム月ム日重抄」とあるという。嘉靖は嘉慶の誤りかとも思われるが、「大明」とある以上、素直に嘉靖ととっておくべきであろう。しからば『唐樂星図聴命文』を含む（『賽上雑用神前本』を除く）13 種の抄本には明(重)抄本の清重抄本の可能性もなきにしもあらずということになる。ちなみに、嘉靖を除く年号が清の雍正以後のものであるのは、雍正元年に楽籍制度が禁革されたことと関わりがありそうである。

ひらがえって、『唐樂星図聴命文』には『礼節伝簿』が 25 種収め、『曲目文範』がひとつも収めない隊戯が 28 種収められていた。この 28 種うち、『礼節伝簿』の隊戯と共通するものは 19 種で、6 種は『唐樂星図聴命文』にはみえない（逆に『唐樂星図聴命文』独自のものは 9 種となる）。隊戯の数は二十八宿に対応する 28 のはずと考えられるうえ（ちなみに『唐樂星図聴命文』の最後の隊戯は「二十八宿朝玉皇一単舞」となっていた）、異なるとはいえ近隣の県の同じく堪輿家の家で発見された、同様の史料に拠り窺い知ることのできる当時の隊戯の数が、万暦に 25 で、嘉慶に 28 に増え、道光に 0 になるとは信じ難いものがある。これまでの研究者は『唐樂星図聴命文』が示す状況を清・嘉慶 23 年のものとみて疑わないようであるが、『礼節伝簿』以前の抄本の嘉慶重抄本である可能性もなきにしもあるまい。なぜ筆者がこの点にこだわるのかといえ、『唐樂星図聴命文』に見えない 6 種のうちの 2 種が「唐僧西天取経」であり「文殊菩薩降獅子」であったからである。果たして『唐樂星図聴命文』が、『唐樂星行早七晩八図巻』が嘉靖元年の(重)抄本であったごとく嘉靖以前の抄本の重抄本であったならば、このふたつの隊戯の依拠した『西遊記』の成立は嘉靖元年以降であり、『礼節伝簿』が反映する祭祀儀式についてもそれ以前には遡らない可能性が生ずることになるであろう。ちなみに、『唐樂星図聴命文』の「雑戯大唐」にみえる「黒雄(熊)精盜宝」（『礼節伝簿』の「二十八宿値日開後」の「亢金龍」にみえる「雄(熊)精倒(盜)宝」,「牛金牛」にみえる「雄(熊)精到(盜)宝」）の成立はそれ以前であったことになり。今後の研究の進展を鶴首して待ちたい。

## 六 【西天取経】の第二・四半分

第二・四半分は「白骨夫人」に始まり、「通天河」（ないし「老君青牛」）に終わる。白虎嶺の白骨夫人は妖怪としては小者だが、訳もなく非暴力を求める三蔵に悟空が追われ、続く「黄袍怪」で三蔵が捕えられ虎に姿を変えられることになるきっかけをつくる。黄袍怪の正体は二十八宿の奎木狼であって、黒

松林の碗子山波月洞を棲家とし、凡心を起こした披香殿の玉女との縁を果たすため下凡して妖怪になったとされ、兜率宮で太上老君の火焚として罪を償い、功があれば復職することになった。後の小雷音寺の黄眉童子の難の際、二十八宿が打ち揃って金の饒鉞に閉じ込められた悟空を救出することになっているから、そこまでに奎木狼の罪は償われたはずである。では何によって償われたのか。「黄袍怪」に続くのは平頂山の「金角銀角」であるが、この二人は兜率宮の金炉と銀炉の童子で、太上老君によって「偷了我的寶貝，走下界来」と説明されている。ところが「鈴束不嚴（監督不十分）」を悟空に咎められた太上老君は、ぬけぬけと「不干我事，不可錯怪了人。此乃海上菩薩問我借了三次，送他在此，託化妖魔，試你師徒可有真心往西去」と言い抜けている。すべては観音菩薩の心のままにというわけである。しからば金炉と銀炉の童子の代役となり、二人を金角、銀角として下凡させ三蔵一行を苦しめさせたことにより、奎木狼の罪は償われたことになる。

金角銀角の難に続くのは烏雞国の難であるが、そこで国王を御園の井戸に突き落として殺し、国王に化けて国を乗っ取っていた妖怪は文殊菩薩の青毛の獅子（獅狎王）とされる。この青毛の獅子はこの後の「獅駝国」にも再登場する。文殊菩薩の管理が杜撰であったか、太上老君の青牛同様、観音菩薩の指示で妖怪となり、三蔵一行の道心堅固なることを試すよう仕向けられていたのだとしても、二度も妖怪となるのは不自然である。これは「烏雞国」と「獅駝国」がおそらく別人により、別の時期に【西天取経】の難の隊列に加わったことを示唆していよう。既引の『礼節伝簿』が当時の【西天取経】の難をすべて取り上げていたとは限らないし、以下で論ずる【江流和尚】との関係もあるから、軽々な判断は差し控えねばなるまいが、『礼節伝簿』の記載を信ずるなら、悟空が文殊菩薩の力を借り、その坐騎だった青獅子を収伏したことを述べる「烏雞国」は「獅駝国」に先行して存在したことになり、「獅駝国」に文殊菩薩の青毛の獅子を登場させたのは「烏雞国」の存在を忘れ、それを再登場させた者のケアレミスということになる。ちなみに「烏雞国」の青獅子が最初に文殊菩薩の坐騎になった次第は朱有燉の『文殊菩薩降獅子』にみえる。しからば「烏雞国」が【西天取経】の難の隊列に加わったのは朱有燉のこの雑劇刊行（宣徳周藩自刊本）以降ということになる。

ひるがえって「烏雞国」の構造であるが、【江流和尚】のそれと甚だしく類似している。「烏雞国」では国王の屍は井龍王により陳光蕊同様定顔珠で保存され、後日悟空が兜率宮で太上老君から手に入れた九転還魂丹で生き返ることになっているし、ながらく会えなかった母子の対面の場面も存在している。両者の相違は江流児故事の有無（と母の貞節の相違）くらいであろう。ちなみに、以下で論ずる太上老君の青牛が登場する「老君青牛」は、この「烏雞国」と老君と青をキーワードとして繋がっているようにもみえる。両者は同時期に（あるいは同一人物により）【西天取経】の難の隊列に加わったものなのかもしれない。この場合には【江流和尚】に陳光蕊の死と再生の物語が加わった時期との関係、ならびにいずれが先行して存在したかが問題となってこよう。

「三 【江流和尚】と魯府本」では、「烏雞国」が【世徳堂本西遊記】に先立つ西遊記物語において、その【江流和尚】を参照しつつ創作された経緯を隠すため、もとづいた【江流和尚】を削除した可能性を論じたが、この死と再生の物語が「烏雞国」と【江流和尚】の間でゆれうごいた可能性もあるかもしれ

ない。なお、【江流和尚】が削除された理由については、可能性は低いものの、以下のように考えることも可能であろう。すなわち、世本の関係者が殷温嬌の自尽（【世徳堂本西遊記】における殷温嬌の陳光蕊還魂後の行動は不明といわざるをえないのだが、今仮に清本のいうごとく自尽したとして論を進める）につき、納得できないものを感じた。かくして【江流和尚】は削除された。だが、九九八十一難のしほりがすでに存在していたため「烏雞国」は削除できない。やむなく「烏雞国」の青毛獅子は去勢されていたことにした、と。同様の措置は「烏雞国」以外にもみられる。第三・四半分にみえる洞賽太歳を名乗る観音菩薩の金毛犼がさらった朱紫国の金聖皇后には、紫陽真人により貞節を守るべく予防措置がなされていた。とはいえ【世徳堂本西遊記】の【江流和尚】では、「三官老爺的故事」のごとく、殷温嬌にも予防措置がなされていて、自尽することなく、三公主らと余生を楽しく送ることになっていたなら話はかわってくる。その方が、「烏雞国」や朱紫国の皇后に対する措置と平仄があっているからである。さすれば清本は【江流和尚】を復活させた際に、当時の社会の要請にあわせ、殷温嬌を自尽させたのかもしれない。遺憾ながら、この疑問にはいまのところ答えるすべがみあたらない。よって、筆者としては、経緯隠しは世本でなされたが、予防措置はすでに【世徳堂本西遊記】の段階でなされていた、ととりあえず考えておきたい。

ちなみに、観音菩薩の金毛犼だった洞賽太歳の寶貝紫金鈴であるが、太上老君が八卦炉で錬り上げたものだったとされている。しかも、この金毛犼は自分の鈴が悟空の用意した偽の鈴とあらかじめすりかえられていたことに気づかず、観音菩薩に収伏されることになっている。これは「金角銀角」にみえる紅葫蘆をめぐりやりとりとまったくの同趣向であった。加えてこの紅葫蘆の出处も太上老君であった。

烏雞国の難に続くのは紅孩児の難である。紅孩児は黒熊精と同様観音菩薩に直々に収伏され、悟空同様金の輪を嵌められ善財童子となった。筆者のいう緊箍呪トリオの一角を構成しており<sup>35</sup>、牛魔王と羅刹女の子で、「女人国」にでてくる如意神仙の甥とされている。羅刹女は『大唐三蔵取経詩話』の「入鬼子母国処第九」や『西遊記』雑劇巻3第12齣「鬼母皈依」に登場する鬼子母から変わったもので、紅孩児は如来に隠された鬼子母の子に相当しようから、ともに古い淵源を持ったキャラクターといえる。牛魔王は、子には父が必要として後に登場することになったわけであろうが、正体を牛としたのは、老子の出関の物語が念頭にあったからであろう。ちなみに、『西遊記』雑劇巻5第19齣「迷路問仙」で、鉄扇公主に夫がいるかと悟空に聞かれた山神は「没丈夫」と答えていた。なお、既述の『唐楽星図聴命文』の「隊子」には「抜花梁州・那(哪)吒太(子)降牛魔王」とあったから、もとは悟空でなく那吒太子が牛魔王を降していたものであろう。いずれにせよ牛魔王の登場は『西遊記』雑劇以降に相違ない。

ここでいささか先走ることになるが、第三・四半分の冒頭、本来なら第二・四半分の掉尾を飾っていたかもしれない「老君青牛」の兕大王と牛魔王の関係につき、いささか論じておきたい。

35 拙論『西遊記』の復路（『中国文史論叢』第2号、2006年3月）を参照されたい。

兇大王の正体は太上老君の青牛だったとされている。兇大王は太上老君が【大鬧天宮】をした悟空の頭に投げ落とした金剛琢を宝貝としており（ちなみに金剛琢は観音菩薩の淨瓶では割れる恐れありとして、老君がかわって悟空の頭に投げ落としたものであった）、最後にはそれを太上老君に鼻輪とされ降参する。しからば兇大王の登場は【大鬧天宮】の段階ですでに予定されていたといつてよかろう。兇大王と同様牛を正体とする牛魔王は、さすがに太上老君と直接関係付けられてはいないものの、【大鬧天宮】のおりに悟空が閉じ込められて焼かれ、七七四十九日後に跳び出し蹴倒した、太上老君の八卦炉のかけらが下界に落ちてできた火焰山の火を消す能力を持つ芭蕉扇を宝貝とする鉄扇公主の丈夫であり、悟空が斉天大聖を名乗った際、語らって大聖を称した六魔王の一人であった。

悟空以外の六大聖は牛魔王の平天大聖、蛟魔王の覆海大聖、鵬魔王の混天大聖、獅駝王の移山大聖、獼猴王の通風大聖、禺狻王の驅神大聖であるが、彼らの多くは悟空が両界山下に封じ込められていた五百年の間に（おそらく二郎神に敗れて）悔い改め（その義兄弟となり）、観音を始めとする菩薩の坐騎などとなっており、すべてに主人の菩薩の命があったかはさだかでないものの（文殊菩薩の青獅子については「他是仏旨差来的」と説明されている）、三蔵一行の行く手を阻む妖怪となって役目を果たしたようである（ちなみに、筆者が六大聖に二郎神との関係を想定したゆえんは、存在に言及されながら何らの活躍をしていないその七兄弟が、もともとそうした経緯をへて義兄弟になった六大聖と想定されていたのだが、後に、難の数を増やすため、下凡して妖怪となり三蔵一行の行く手を阻むよう、おそらく別人によって変更されたため、義兄弟即六大聖の構想はうやむやにされたと考えたからである。なお七兄弟には二郎神も含まれている）。牛魔王も「牽牛徑帰仏地回繳」とあるから、夙に如来に降っていたが、仏地を逃げ出し気随気まま過ごしていたのか、「仏旨」があったのかもしれない。ちなみに牛魔王は【大鬧天宮】で悟空と二郎神が繰り広げた化け比べを悟空としていた。なお『朴通辞諺解』には「火炎山」とあるが、そこに牛魔王が登場していたかは不明である。羅刹女の宝貝芭蕉扇も、「金角銀角」や「老君青牛」で言及される太上老君の八卦炉の火を煽ぐ芭蕉扇とは似て非なるものであり、老君に回収されることなく羅刹女に返されていた。しからば「火焰山」も「老君青牛」とは異なる時期に、おそらく別人により【西天取経】の難の隊列に加えられた可能性が高いことになろう。ちなみに、観音菩薩が如来から授けられた五件の宝貝は紅孩児で使い果たされていたから、当初の西遊記物語ではこのあたりで、少なくとも悟空の手に余る妖怪の登場は終わっていたのかもしれない（なお禺狻王の禺は本来彘に禺だが、禺で代用する。以下同様）。

話帰正題、紅孩児の難以降、鼉精、車遲国の難があつて、最後に魚籃観音の登場する通天河の難となるのであるが、黒水河の鼉龍は涇河の龍王の子で西海龍王の甥とされ、船頭に化けて三蔵と八戒を乗せた舟を中流で転覆させ三蔵を捕らえた。しからば「夢斬涇河龍」から派生した難といつてよかろうし、凌雲渡の難の無底船と通底する部分もありそうである。加えて、通天河の難にも黒水河の鼉龍の難との間に類似性が認められる。両河とも元来の水神が、その地位を外来の観音菩薩の蓮花池の鯉魚（楊本）または金魚（世本）、西海龍王の甥の鼉龍に乗っ取られていた。鼉と鼉龍も類似している。両者は被害者と加害

者を入れ替えリライトされたものに相違ない。問題は両者のいずれが先行して存在したかであろう（後述）。

「車遅国」は『朴通辞諺解』や『礼節伝簿』に引かれているから、夙に【西天取経】の一部になっていたはずである。とはいえそこにみえる三蔵の雨乞は『西遊記』雑劇卷1第4齣「擒賊雪讐」、卷2第5齣「詔餞西行」にみえるその焼き直しであろうし、悟空の釜茹も「五荘観」にみえていた。『礼節伝簿』には「五荘観」、「車遅国」に相当する「銷(鎮)元大仙献人参果」、「車似(遅)国」が挙げられているが、詳細な内容は不明であるから、両者ならびに釜茹の趣向の先後については軽々には決め難いものがあるのだが、筆者は「車遅国」が「五荘観」に先行したろうと考えている。

最後に通天河の難であるが、西遊記物語成長の最終段階で【修正】されたものとみなせる。普陀巖の観音菩薩の蓮池から逃げた金魚が、いくら法力があるといっても「海潮泛漲」に乗じて内陸の八百里通天河にやってきて、主であった鼈を追い出し水府を乗っ取ったとする設定は、いかにも説得力を欠いている。異域にはこれを取り巻く水域があり、渡し守が異域の主を訪ねる主人公に、そこを離れられない自身に替わり、異域の主自身に自身の悩みへの回答を求めるといふ、全世界的に存在する民間故事<sup>36</sup>があるのだが、通天河はその水域、鼈はその渡し守であった。つまり通天河は本来凌雲渡の位置になければならなかったのである。とはいえ漢族にとっての異域とは印度ではなく、古来より西王母のいる崑崙であり、それを取り巻く水域はといえば何物をも浮かべることができない弱水であった。それこそが、靈山を取り巻く水域、すなわち鼈が水神であった原通天河が【西天取経】の道の半ば、否、崑崙の位置する西域の地に移動したゆえんであったろう。

弱水のイメージは『西遊記』に登場するすべての河を支配している。だから三蔵は通天河で二度に亙って溺れ、凌雲渡の無底船で一度水中に落ちて引き上げられることにより凡体を脱することになっていた。沙悟浄がいた「八百流沙界、三千弱水深。鵝毛漂不起、蘆花定底沈」と石碑に記されていた流沙河もそうであったし、三蔵が水中に引きずり込まれる黒水河についてもそのようにみてよかろう。

あらかじめすべてを知っている如来は、鼈の依頼が果たされず、ために鼈が渡し守の役目を途中で放棄するであろうことを承知していたはずである。だから足りない一難を鼈に果たさせるべく、通天河の手前で一行を雲から降ろさせたのであるが、それだけのことなら鼈が渡し守をしている河（通天河）を靈山の麓に置いておいても差し支えはなかったろう。それがそうならないのには別の要因があったはずである。筆者は金魚ならぬ鯉魚の精による難がかつて道半ばに近い地点にあり、それを模様替えたのが「通天河」だったのではないかと考えているのだが、この点の詳細については後述に譲りたい。

通天河の靈感大王の難が西遊記物語成長の最終段階で大【修正】されたものであったのなら、第二・四半分は本来「老君青牛」までであって、その【構想】は観音菩薩が太上老君と談合してお膳立てした諸難を、三蔵一行に克服させるというものであったろう。

36 このタイプの民間故事は「三根魔鬚」と命名されているが、中国では異域の主が如来となっているので、「西天問仏、問三不問四」と命名されている。

## 七 【西天取経】の第三・四半分

通天河を渡れば本来如来がいます霊山のはずであったのだが、それが道の半ばに移動し、取経の目的を遂げた後、雲に乗って帰国し、なおかつ再度西天に戻る【構想】が持ち込まれるに及び、もともと往路後半に置かれていた難に加え、新たな難が新設され、帰路に置かれていた難やイベントのいくつかについても、延伸されることになった往路後半に移されたとおぼしい。だが、往路の前半、甚だしくは出発以前に移動させられたものもあったはずである。

第三・四半分は女人国の子母河に始まり、獅駝国に終わると思われる。子母河はこれに続く西梁女国の導入部のごとき位置付けになっている。西梁女国は『大唐三蔵取経詩話』に「経過女人国処第十」が、『西遊記』雑劇の巻5第17齣に「女王逼配」があり、『朴通辞諺解』に「女人国」、『礼節伝簿』に「女兒国」が挙げられているから、由来の古いもので、漢人の女人国幻想にそったものであったろう<sup>37</sup>。子母河はおそらく西梁女国より後に創作されたとみられるが、落胎泉を管理する仙人に如意神仙の名を与え紅孩児の叔父としたのは、さらに後の牛魔王や紅孩児が登場してからのことであろう。

琵琶洞の蝸の精も女怪であり、三蔵をさらってよいことをしようと逼るから、「女人国」以降「子母河」以前の時期に、一連の女難の流れのなかで設けられたものであったろう。観音菩薩が雄鶏の昴日星官を推薦したとなっていることに鑑みれば、以上三つの難の少なくとも細部については、観音菩薩が【西天取経】のプロモーターになって以後に書き加えられたものとみてよかろう。それならそれはいつ頃か。『西遊記』雑劇には齣ごとに見開きの図がひとつ附されているのだが、このうち観音菩薩がお姿を現しているものは五つで、すべて【西天取経】以前であった<sup>38</sup>。挿図なしで観音菩薩が言及されている齣も【西天取経】部分では「鬼母皈依」のみのものである。つまり『西遊記』雑劇において観音菩薩が表にでる場面は三蔵法師が取経の旅に出発する以前に偏っていたのである。観音菩薩（と太上老君）の【西天取経】における比重は『西遊記』雑劇から世本に至るまでの間に飛躍的に高まったのである。

琵琶洞の難に続くのは六耳獼猴の難である。六耳獼猴はいってみれば悟空のドッペルゲンガーであったが、正体は通風大聖を名乗った悟空の【大鬧天宮】時代の大聖仲間の獼猴王でもあったろう。「六耳獼猴」に続く「火焰山」では平天大聖の牛魔王が登場するが、獅駝嶺でも文殊菩薩の青獅子と普賢菩薩の白象が、獅駝国では如来の縁者とされる大鵬金翅鵂が妖怪になって登場している。この三妖怪も獅駝王の移山大聖、禺狻王の驅神大聖、鵬魔王の混天大聖であったかと思われる（蛟魔王の覆海大聖のみそれらしき妖怪が【西天取経】に登場しないのは、取経の旅が陸路によってなされたからであろうか）。牛魔王は紅孩児のこともあって悟空を覚えており、遺恨も抱いていたとされるが、通風大聖以下には悟空の記憶はなかったようである。一度収伏され悔い改めると妖怪

37 女人国幻想について論じた拙論に「鬼国統記（夷堅志） 史家と奇見異聞」（『中国古典文学 作品選読』所収、東京大学出版会、1981年4月）がある。

38 「逼母棄児」「擒賊雪仇」「華光署保」「神仏降孫」「収孫演呪」の五つの齣がそれ。このうち「華光署保」は以後の西遊記物語のいずれにも言及されていない。

時代の記憶を失うという設定になっていたのかもしれないし、【大開天宮】に七大聖に言及する部分を書き加えられたのが『西遊記』完成の最終段階であったためかもしれない。ちなみに『朴通辞諺解』には【西天取経】の第三・四半分の難とおぼしき、蜘蛛、多目怪、棘鉤洞、火焰山、薄屎洞、女人国の名があがっている。棘鉤洞は荊棘嶺と、薄屎洞は稀柿術と同じものであって、観音菩薩と太上老君に関わる大增補以前に、個別に難の隊列に加わっていたと推定される。そこに「初到師陀国界、遇猛虎毒蛇之害」とある師陀国については、「黒熊」や「黄風怪」以前に置かれている点に鑑み、第5難の「出城逢虎」、第6難の「折從落坑」を指しているとみるのが妥当であろう。獅駝国はそこから名を借り、菩薩や如来を登場させるなど、第三・四半分の掉尾を飾るに相応しいものとなるよう【修正】、というより規模を拡大し移動させられたものと筆者は考えている。

言帰正伝、「火焰山」から「獅駝国」までの間には、九頭鳥の祭賽国、荊棘嶺、小雷音寺、稀柿術、朱紫国に蜘蛛と蜈蚣の妖怪の難が置かれていた。このうち蜈蚣の精の多目怪は蜘蛛との関連で難の隊列入りを果たしたとおぼしいが、『礼節伝簿』に「夕用(多目)妖怪一百眼、天(万)波降金光霞佩」とあるから、遅くとも万暦2年までには登場していたに相違ない。多目怪は毘藍婆菩薩に退治されるが、悟空に毘藍婆菩薩を訪ねるよう教示した黎山老母は、たまたま三蔵の難儀をみかけてなどといっているが、かつて三蔵一行の道心を試すべく観音、文殊、普賢の化けた娘の母として登場しているから、この難も観音菩薩が仕組んだもの（少なくともそのように改変されたもの）だったに相違ない。毘藍婆菩薩は昴日星官の母（楊本、朱本では妻で鶏母王とされる）であり、昴日星官は琵琶洞の難で蜈蚣妖怪を退治している（『礼節伝簿』に「蠍子精」とある）。およそ観音菩薩のプロモートした難（ないしそのように記す部分）は、西遊記物語成長の最終段階近くで書き加えられた（あるいは書き改められた）ものとおぼしいから、そうした難がみあたらない『西遊記』があれば、世本の節本と考えるより、【世徳堂本西遊記】に到る以前の原『西遊記』（本論でいう原『西遊記』は、『西遊記』の四つのパーツ、すなわち【大開天宮】【江流和尚】【唐太宗入冥】【西天取経】が出揃って以降のものを念頭においているが、このうちの【西天取経】は徐々に充実し、最後に一貫した構想により整備されたはずであるし、他の三つの部分、とりわけ【江流和尚】はなかなか原『西遊記』に定着しなかったようであるから、原『西遊記』といってもいくつかの段階が存在したと考えている）に近いものと考えての方が合理的であろう。小雷音寺の黄眉童子の難には既述のごとく奎木狼が登場していたし、祭賽国の難を引き起こした九頭鳥の棲家、乱石山碧浪潭には牛魔王が出入りしていた（『礼節伝簿』には「牛魔王」に続き「九頭附(駙)馬」とある）。こうした点に鑑みれば、この二つの難も琵琶洞や多目怪の難と同じ時期に新設されたとみてよいのではあるまいか。

## 八 【西天取経】の第四・四半分

【西天取経】の第四・四半分は比丘国に始まり「老鼈作祟」で終わるが、既述のごとく、凌雲渡と通天河はペアであり番外ともいえるから、実質は銅台府

で終わっている。第四・四半分には観音菩薩も太上老君も登場しない。観音菩薩から三蔵の護衛を申し付けられていた六丁六甲以下の日直神の応援程度でことたりる程度の妖怪しか登場せず、観音が出張るまでもなかったからであろう。それゆえ妖怪や難も既視感のあるものが多い。思うに、この第四・四半分の難は三蔵一行の帰路におこった出来事がもとになったものでないとしても、九九八十一難の数合わせで創作された、つまり西遊記物語成長の最終段階で新たに設けられたものであったのではあるまいか。

具体的にそれを見てみよう。比丘国の国丈は寿星の鹿（と玉面狐狸）が化けたものであり、主人の寿星に引き取られた。寿星は「五莊観」や遡っては【大鬧天宮】に登場しているし、鹿の妖怪は「車遅国」の鹿力大仙を想起させる（玉面狐狸は牛魔王の愛人の玉面公主を思わせる）。【大鬧天宮】では当時の斉天大聖孫悟空の交際相手が丁寧に紹介されていたし、【西天取経】でも悟空がしばしばかつての交友仲間に言及する。難の仕掛人や実行者がかつての仲間であり、いわば車懸かりで悟空を闘戦勝仏に引き上げようとしたことがほのめかされているのかもしれない。

閑話休題、「比丘国」に続く無底洞の地湧夫人の耗子（金鼻白毛老鼠精）は李天王の縁者とされているが、三蔵によいことをしようと迫るから、琵琶洞の蝸子精を想起させる（地湧夫人は『礼節伝簿』ではなぜか「地勇夫人」「李天皇、哪叱太子降地勇」と二箇所に分かれてでてくる）。「滅法国」の妖怪艾葉花皮の豹はめずらしく主人のいない妖怪と設定されており、主人の宝貝を持ち出したわけでもなかったから、悟空の敵ではなかった。人気のないのに乗じて弟子たちの得物を盗んだ鳳仙郡の獅子は九靈元聖を名乗る太乙救苦天尊の獅子を祖と仰いでいたが、一見おそろしげなその九頭の獅子も、天尊に一喝されるや途端に戦意を失っている。九頭の妖怪は、先んじて祭賽国の難にも九頭鳥として登場している（九頭鳥は『礼節伝簿』にも「九頭附（駙）馬」としてみえている）。「九頭獅子」に続くのは玄英洞の三頭の犀牛精であるが、情けないことに、このうち一頭は二十八宿の井木犴に首を噛み切られてしまっている。

三蔵一行はかくして給孤独園をへて天竺国に入ったのであるが、公主の婿選びの場面に遭遇する。三蔵は案の定公主に毬（楊本、朱本では鞭）をあてられ、駙馬にさせられそうになる。この公主、実は太陰星君の玉兔が化けたものであり、本物の公主は給孤独園の老僧に匿われていたのであった。撞天婚の趣向は世本で削られた【江流和尚】に、三蔵の父陳光蕊と殷温嬌の間のこととしてみえている。両者の登場と退場の間には密接不可分な関係があったはずである。筆者は第78難の「天竺招婚」や第26難「烏雞国救主」の登場が、世本における【江流和尚】本文消滅の引金のひとつとなったと考えている。

言帰正伝、三蔵一行は最後に銅台府にやってくるが、そこで親切に一行をもてなしてくれた一家の主人が一行の出立直後に強盗に殺されたことで嫌疑をかけられ、牢に捕らわれる。この第79難「銅台府監禁」には妖怪が登場せず、それまでの難とは様相が甚だしく異なっている。諸般勘案し、筆者は第四・四半分、とりわけ天竺国に入って以降の難は、三蔵一行が本来陸路にて長安に帰還する設定であった当初の時期のイベント（難）に手を入れ再利用したものであったのではなかったかと考えている。

## 九 童子戯の西遊記物語(一)―【江流和尚】と【唐太宗入冥】

童子戯についてはこれまでもたびたび言及してきたが、ここでまとめて述べておくことにしたい。現在見る事のできる童子戯のテキストは『十三部半巫書』『江蘇南通童子祭祀儀式劇本』『江淮神書』所収のものに限られる。再度繰り返すことはしないが、童子戯のテキストにはさまざまな問題点がある。そもそも文革後に新たに写定された宗教口承文芸のテキストにより、三百年以上前に刊行された世本やそれ以前の西遊記物語の成長過程につき論じようとする筆者の研究姿勢に疑問を覚える方もおられよう。だが、しばしお付き合い願って、その後で筆者の所論への当否をお決めいただければ幸いである。

筆者がこれまでの拙論（複数あるが以下ではまとめて前論と称することにする）で参照し得たものは出版時期の関係で『十三部半巫書』（内部出版ゆえ前論での扱いと同様とする）と『江蘇南通童子祭祀儀式劇本』（以下では曹琳蒐集本、略して曹琳本と称する）に限られていた。それゆえ本論ではこれに『江淮神書』（以下では朱恒夫・黄文虎蒐集本、同様朱黄本と略称する）所収のものを加え、改めて論ずることにしたい。

童子戯のテキストには『西遊記』の【江流和尚】【唐太宗入冥】【西天取经】と同一テーマを扱っているものはあるが、【大鬧天宮】に関わる単独のものは蒐集されていない。おそらく【大鬧天宮】単独では孫悟空の死と再生の物語が完成しなかったためであろう。加えて童子戯では、太宗の冥府での誓いが、曹琳本では「一許西天将経取，二許進瓜入幽邦，第三許下洪門会」，朱黄本では「一許西天経来取（一許西天経七卷），二許南瓜入幽冥，三許龍楼三道表」となっていて、第三の誓いが『西遊記』とまるで異なっており、なおかつこの誓いをめぐる魏徴の息子の九郎（もしくは五郎）を主人公とする物語が、〈唐僧取经〉の後に置かれた〈劉全進瓜〉に続いて語られることになっている。加えて『西遊記』の「魏徴夢斬涇河龍」に先行する部分も存在している。そうした部分<sup>39</sup>の詳細については機を改めて論ぜざるをえず、本論では『西遊記』と同じ内容を語る上記の三部分を中心に論を進めてゆくのであるが、困ったことに、曹琳本が1タイトルであるものを朱黄本が複数タイトルに分割していたり、分割してはいたくとも名称を異にしていたりする場合があった。

『西遊記』の【江流和尚】に対応する童子戯は、朱黄本では〈陳子春上任〉、〈江流認母〉と題される抄本（いずれも「光緒十一年清和月吉立」と記されている）であるが、これに続く〈唐僧取经〉（「九一年古曆七月立」と記される阮有江<sup>40</sup>抄本）の前文部分も同内容を簡潔に述べている。曹琳本では〈陳子春〉（如

39 朱黄本には「夢斬涇河龍」対応する〈魏徴斬龍〉以前のものとして〈袁樵擺渡〉〈袁天罡算卦〉が、〈劉全進瓜〉に続くものとして〈宣魏徴 王二下書〉〈魏九郎出学〉〈天文地理〉〈龍宮借馬鞍鞭〉が収められている。曹琳本にもこれらと異名の対応する童子戯が蒐集されているが、上記のほかには〈魏五郎遊十八関〉〈請星迷路〉〈陽元請神〉や、筆者が前論で『西遊記』との関係を論じた〈鄭三郎成仏伝本〉などが収められている。

40 黄文虎の、『江淮神書』所収の「千年流伝の俗語俚曲—江淮神書芻義」が指摘するごとく、朱黄本〈唐僧取经(下)〉には「西遊記上二十部，事多年久記不清……我今不能往下念，抄近説短好取经」とあり、以下に「抄近説短」された難が挙がっている。黄文虎は「此書（筆者注：〈唐僧取经(下)〉）老本係阮兆銀（雲）抄于民国十七年。新抄本係1991年阮有江根拠時年81歳の張柏林口述記録。阮有江是阮兆雲兒子，他再抄新本，是因

皋市花園郷秦海榮手抄本。秦海榮は1928年生まれとされる)がこれに相当する。以下に童子戯の原文(とそのタイトル)を引き論ずる場合には、新資料という意味で朱黄本を優先することにするのだが、タイトルについては全般をカバーする曹琳本にしたがい、仮に「陳子春」を両者の総称としてもちいている(他にも同様なケースがある)ことをあらかじめお断りしておきたい。

「陳子春」は朱黄本、曹琳本とも、陳子春が殷小姐との間に三蔵(江流児、湍来僧)を、龍王の三人の公主との間に正月十五日、七月十五日、十月十五日生まれの三子(天官、地官、水官即三官、三元)を儲けたとする。のみならず、龍宮で再生した陳子春が殷小姐の安否を尋ねて洪州にゆき、劉洪に再度殺され、その屍が枯井戸に放り込まれ、石板で蓋をされ、上には芭蕉が植えられたとする(尸首放在枯井里，石板盖得緊騰騰，上頭栽了芭蕉樹)。この記述は烏雞国の国王殺しを連想させずにはおかない。しかも陳子春の屍は再生に備えるべく、井龍王ではなかったが土地神に仙丹を口に含まされて井中に保存されていた。後日子春は三公主が三元に渡した三粒の仙丹のうちの一粒で復活するのだが、それを知り会わせる顔がないと殷小姐が自尽したと知り、後を追って自ら命を絶つ。二人はともども残る二粒の仙丹で再生し、三蔵が西天に旅立った後、水晶宮で三公主、三元とともに暮らしたとされる。殷小姐を自尽したままにしないところなど、【西天取経】の「烏雞国」の皇后や、「朱紫国」の金聖皇后の扱いと同様の配慮を感じさせる。ちなみに、三官は『西遊記』の諸難が言及される『目連救母勸善戯文』の上巻第6齣「三官奏事」などにも登場している。しからば【世徳堂本西遊記】や原『西遊記』に三官への言及があった可能性もまんざら否定できないのではあるまいか。

童子戯の『唐僧取経』には「烏雞国」への言及はなかった。だから清代のいずれかの『西遊記』の烏雞国の難を参照しつつ、「陳子春」の陳光蓋の二度目の殺害をめぐる経緯が創作(とっておく)され、その経緯を糊塗すべく、烏雞国の難が『唐僧取経』から抹消されたと考えることもできなくはない。だが異なる時期の異なる童子が写定した「陳子春」が同内容を語っている以上、そうとばかりはいえまい。そもそも烏雞国の難をもとに「陳子春」の増補ができる童子がいたなら、それこそホメロス顔負けの詞人なのではあるまいか(ちなみに筆者は中国では詩人より詞人の方がよりふさわしいと考えている)。

ここで『西遊記』と童子戯の関係につき、筆者が現在考えている見通しを簡単に述べておきたい。陳子春と龍宮三公主ならびに三官に関わる宗教口承文芸が、数百年前から通州、海州といった江淮地域で語られており、ほどなくそれと江流児故事が合体融合した【江流和尚】の物語が西遊記物語の重要なパーツとなり、やがて原『西遊記』、次いで【世徳堂本西遊記】に組み込まれたが、三官大帝の存在がネックとなって、世本からは【江流和尚】の本体が抹消されてしまった。だが清代になるや、三官大帝関連部分のみを省いた【江流和尚】が復活し、それが『西遊記』の清版となった。童子戯の「陳子春」は原『西遊記』ないし【世徳堂本西遊記】時期の【江流和尚】ないしはそれに近いものが、多少の【修正】を施されつつ代々語り継がれてきたものであって、それが1920

---

為老本不全」とも述べており、老抄本の残本も『江淮神書』に収められているのだが、そこにも同様な記述が見える。よって「抄近説短」された時期は民国十七年を相当遡ることになる。

年代に上海で出版されたものが「石印鼓詞」の『陳子春』、1928年の老抄本と1991年の新抄本を取めたものが朱黄本、おそらく文革後に秦海榮により手抄されたものが曹琳本である、と。『西遊記』の【江流和尚】と童子戯の「陳子春」の間に限らず、『西遊記』（或いは西遊記物語）と童子戯の間の関係は一方的な継承関係にはなく、相互に、或いは交互に影響を及ぼしあう微妙な関係にあったのである。

既述のごとく、『西遊記』の【唐太宗入冥】は「唐太宗入冥記」に由来する部分の中核となり、その前に「(魏徴)夢斬涇河龍」とこれに先行する漁樵問答が配され、【劉全進瓜】その他が後に置かれる形をとっている。朱黄本の「唐僧取経」には、雷音寺での受経を語る部分の後に、南瓜、西瓜に言及する部分があり、曹琳本でも西瓜が言及されていた。加えて童子戯の「劉全進瓜」は『西遊記』と異なり、三蔵一行の帰途におかれていた。ちなみに朱黄本、曹琳本いずれの「陳子春」においても、冥府での誓いの順序は一に西天取経、二に進瓜であった。よって以上二点が密接不可分の関係にあることは明らかである。さらに「唐僧取経」で三蔵が授かるとして名の挙がっている経は、法華経、華嚴経、孝生経、血盆経、金剛経ならびに三官大帝に関わる三官経（と大悲呪、梁王懺）であるが、『西遊記』の5048巻（その内容はかなり杜撰のものであるが）と共通するものは法華経、華嚴経、金剛経のみに過ぎない。『西遊記』では相良からの借銭返却の代わりに果たされる大相国寺の建立であるが、時代錯誤も甚だしく、数合わせの感が拭えない。童子戯ではこれが魏徴の子の九郎（ないし五郎）が洪門会（即ち童子がその時取り仕切っていた祭祀儀式）への参加を求めて神人のもとを訪ねるとなっていることはすでに述べた。

九郎は出発に先立ち、馬、鞍、鞭を借りにゆく。これは童子（や道士）が天帝などに文書を発出すると紙馬を持って舞い、最後にその文書と紙馬を焼却する祭祀儀式を物語化したものとみてまず間違いなからう。魏九郎とは童子自身であり符使官であったのである<sup>41</sup>。

ひるがえって、曹琳本は朱黄本の「龍宮借馬鞍鞭」に相当するものを「九郎借馬開東海」×「九郎西京買鞍配」×「魏九郎借鞭」の三本立てとするが、内容は変わらない。もとづく抄本の持ち主が異なっていたからであろう。朱黄本はここまでで終わっているのだが、曹琳本には借りた馬と鞭、買った鞍により具体的に文書を届ける過程と、その後施主が童子に依頼しておこなう功德の祭祀儀式、ならびにこれに集う諸神の詳細を記した「魏五(九)郎遊十八関(通州市四安郷陳張鈴手抄本、通州市幸福郷李福田蔵抄本)」×「請星迷路(通州市四安郷陳張鈴手抄本)」×「陽元請神(通州市横港郷徐耀鴻手抄本)」が続いている。『十三部半巫書』の構成も同様であった<sup>42</sup>。朱黄本の童子戯蒐集方針は、童子戯のテキストを小懺、唐懺、閑書（と開壇唱念与法事）に分け、唐懺として『西遊記』に関係するものを集めるといったものだったとおぼしく、魏九郎関係のものうち、童子の祭祀儀式をそのまま物語化したとみなせる上記の「魏五(九)郎遊十八関」以下の三本については蒐集されていない。

41 『江淮神書』に「跳五郎(五郎官)」があり、童子の扮する五郎官が地府に至り「下公文」するさまが演ぜられている。

42 註30の拙論を参照されたい。

## 十 童子戯の西遊記物語(二)―【西天取経】

以下では童子戯の〈唐僧取経〉と世本の【西天取経】を比較してゆこう。〈唐僧取経(下)〉の末尾に、かつては演ぜられていたが今は端折る(我今不能往下念、抄近説短好取経)として複数の難が挙げられていることは既述した。ここではまずそれを具体的にみてゆくことにしよう。以下の九つの難、すなわち、「雁(鷹)愁澗収白龍馬」「洞庭湖収鯉魚精」「喜喜洞収喜珠子」「白骨山収白大(夫)人」「烏風洞収青牛怪」「頼宝山収頼猴精」「蘆溝橋吊紅孩児、観音収去帯在身」「獅子嶺(嶺)収獅子怪」「西洋国収女妖怪」がそれで、その後弱水河を鼈の背に乗って渡ると雷音大寺が目前に見えるといっている。

正行挙目抬頭看，弱水河在面前存，鵝毛下水沉到底，怎能過的此河心。不表唐僧心煩惱，水上漂来癩頭鼈。癩頭鼈口吐人言語，師父連連叫幾声，我今渡你過河去，代我伝言問一声，西天問問如来仏，我的天下有幾春。唐僧答应我曉得，代你伝言問一声。師徒坐在脊背上，鼈精駝他過河心。過了弱水河一座，雷音大寺面前存……

かくして如来から経文を授かることになるのだが、その帰途の再度の弱水渡りの際、如来から九百年といわれた鼈の天下を八戒が聞き忘れたふりをした。怒った鼈がいきなり水に潜ってしまい、経文が濡れてしまう。結果として、鼈の九百年の天下は八戒、悟浄と三分割されることになった。以上の朱黄本に対し、曹琳本は八個の饅頭を鼈と八戒で四個ずつ分けたとする。これは鼈即ち元と猪(朱)八戒すなわち明がそれぞれ四百年天下をとることを示唆していよう。だが朱黄本のごとく沙悟浄も分け前に与るとなると、悟浄は清を意味し、朱黄本のこの部分は清代に改変されたものということになるのかもしれないが、仮にそうだとしてもそうなる理屈がわからない。浄だから清だというならこじつけが過ぎよう。ちなみに『礼節伝簿』の「唐僧西天取経」は猪悟能とせず朱悟能とするが、この楽舞(哑)隊戯を演じていた楽戸に、建文帝を擁したため永楽帝に山西等の省に貶された、かつての朝廷の重臣や皇親国戚が多かったというのなら<sup>43</sup>、そこに何らかの意図があったかと思われるが、今それを軽々に云々することはできない。

話帰正題、既述の演ずるのを端折ったとされる諸難であるが、「雁(鷹)愁澗収白龍馬」は陡澗換馬第9難を、「喜喜洞収喜珠子」は七情迷没第59難を、「白骨山収白大(夫)人」は貶退心猿第20難を、「烏風洞収青牛怪」は金兜山遇怪第39難以下〔老君青牛〕を、「頼宝山収頼猴精」は再貶心猿第45難以下〔六耳獼猴〕を、「蘆溝橋吊紅孩児、観音収去帯在身」は号山逢怪第28難以下〔紅孩児〕を指すとみてまず間違いない。「獅子嶺(嶺)収獅子怪」には失落兵器第73難以下〔九頭獅子〕、「西洋国収女妖怪」にも天竺招婚第78難の可能性が考えられる。当然ながら以上の諸難は朱黄本の〈唐僧取経〉では語られていない。問題は「洞庭湖収鯉魚精」である(なお金兜山の兜は本来山偏に兜だが、兜で代用する)。

43 寒声・栗守田・原双喜・常之坦「《迎神賽社礼節伝簿四十曲宮調》初探」(『中華戯曲』第3輯、山西人民出版社、1987年4月)。

「洞庭湖収鯉魚精」が洞庭湖を舞台とし、鯉魚精を登場させる難であったろうことは明らかであるが、その条件に適う難が『西遊記』の【西天取経】にはみあたらない。だから単に端折られたのではなく、「世本」ではいずれかの難に模様替えされているに相違ない。筆者は、取経の経路からは誰が考えても外れている長江中流の洞庭湖を最上流の通天河に、鯉魚の精を蓮池の金魚の精と替え、通天河の難、すなわち路逢大水第36難、身落天河第37難、魚籃現身第38難としたのではないかと考えている。なぜなら、曹琳本には上記の語られなくなった諸難を紹介する一節がなく、【西天取経】の「収八戒」と「収悟浄」に相当する難の間の陳家荘で、悟空と八戒が陳官保、陳金定に化けて洞庭湖の鯉魚精と闘う段があり、溺水河が火焰山の後に置かれ、「溺水河無擺渡癩鼈精渡過」とある一方、通天河は言及されていないからである。

先の引用に「鼈精駝他過河心，過了弱水河一座，雷音大寺面前存」とあったように、朱黄本も鼈のいるのは通天河ではなく弱水とし、それは雷音大寺の面前にあったとしている。溺は弱水からの連想であろう。しからば現存の童子戯から想定されるかつての原『西遊記』では靈山の直前に鼈のいる弱水があり、道の半ばとされていたかはわからないが、取経の旅の經由地とされた洞庭湖に、人身御供を求め鯉魚精がいたことになっていたに相違ない。それがあつた時期に洞庭湖を取経の旅に相応しい名称の通天河にかえ、これにあわせて鯉魚精も蓮池の金魚精と替え、観音菩薩に収伏させることにした。否、事實は逆で、観音菩薩を登場させるために洞庭湖、鯉魚精を通天河、金魚精と替え、あわせて靈山をとりまく弱水にいた鼈もこの通天河に引っ越させたのかもしれない(通天河にせよ弱水にせよ、それを洞庭湖にかえねばならない理由はありそうにない)。

【西天取経】で三蔵一行は、雲に乗って長安に帰る途次、通天河の西岸で雲から降ろされ、わざわざ鼈の背に乗って通天河を渡ることになっている。往路で依頼した質問を果たしてくれなかったことを怒った鼈が突然沈み、経文を濡らすという第81難により、九九八十一の難を満了させるためであった。中途下車までさせ、わざわざ「老鼈作崇」を体験させた点に鑑みれば、九九八十一難の設定は洞庭湖の通天河への模様替えと同時またはそれ以後になされたとみてよからう。加えて、鼈による弱水の渡河と問仏はそれ以前に存在していたことになろう。ちなみに朱黄本にも朱本にも金魚の精や通天河は登場していない。

『西遊記』雑劇とは異なり、『西遊記』での観音菩薩の出番は【西天取経】(と【大鬧天宮】)に限られているとあってよかった。繰り返すことになるが、そこで観音菩薩は三蔵(一行)の道心堅固なることを試すべく、太上老君や(おそらく)親しい菩薩、神仙などに依頼し、その配下の者や(収伏され)その坐騎となっているかつての妖怪などへの監視を緩めさせ、下凡し妖怪となって三蔵一行を苦しめるよう仕向けさせ、一行に自身の有難みを認識させるべく、重要な場面では自ら三蔵の救出に向いたりもした。【西天取経】の難には古い淵源のあるものもあったが、【世徳堂本西遊記】の時点で新たに加わったり【修正】され面目を一新したりしたものも相当数あつたはずであり、それらには【世徳堂本西遊記】の編者(呉承恩かもしれないが、その点の本論では論じない)の意図が貫徹されていたはずである。しからばそうした難がみあたらない『西

遊記』が存在していれば、それは【世徳堂本西遊記】に先立つ原『西遊記』（ないしはそれを受け継ぐもの）とみてよいことになろう。おそらく原『西遊記』の【西天取経】部分はそれほどの紙幅を占めるものではなかったはずである。

【西天取経】の三蔵は、河州衛を出立するや双叉嶺で伴の者を寅將軍らに喰われるが、劉伯欽に救われ、悟空を両界山で弟子とするのだが、六人の盗賊を殺めた悟空を無益な殺生をしたと叱責したため、悟空に出奔されてしまう。そこに老婆に化けた観音菩薩がやってきて、緊箍呪を授ける。花果山へ帰る途次、東海龍王の水晶宮で一服した悟空はそこで気が変わり、出会った観音菩薩に諭されたこともあって、三蔵のもとに戻り、きれいな帽子とと思って嵌金花帽をかぶってしまい、緊箍呪で三蔵に従わざるをえなくさせられる。

童子戯の曹琳本、朱黄本はこれと展開が異なるのみならず、相互にも異なっている。曹琳本は【西天取経】の蛇盤山鷹愁澗にあたる鶯愁澗が語られた後（【西天取経】とは順序が異なる）、六盤山で悟空が金角、銀角と六人の盗賊を殺め、三蔵に叱責されて花果山に帰ってしまう次第が語られる（金角大王、銀角大王の登場する平頂山逢魔第 24 難、蓮花洞高懸第 25 難に相当する難は存在しないし、六盤山とある以上、盗賊は六人のはずであった。したがって金角、銀角は「金角銀角」の省略の代償に、名のみここに持ち出されたに相違ない）。すると観音菩薩が現われ、三蔵に緊箍呪を授けて花果山にゆかせる（扮作江湖一客人、不弄鼓兒拿在手、花果山到面当迎）。曹琳本には【大鬧天宮】に相当するものは蒐集されていないものの、その存在は示唆されており、花果山は「鰲梨国神州地界」にあるとされている（鰲梨国は傲来国、神州は東勝神州であろうが、さすがに海東とはいっていない）。

対する朱黄本は、悟空の凶行の現場を八盤山とし、盗賊の数と一致させているが、八人のなかに金角、銀角はいない。悟空は花果山で愉快にくらしていたが、三蔵が緊箍呪を唱えると頭が痛くなり、やむなく三蔵のもとに帰り、以後の恭順を誓うとなっている。悟空が弟子になる以前に観音菩薩によって三蔵の道心が試されたおり（【西天取経】では四聖頭化第 17 難となり、置かれる位置も内容も変わった）、三蔵には緊箍呪とくだんの帽子が授けられていて、目ざとくそれを見つけた悟空がすでにそれをかぶっていたからであった（陡澗換馬第 9 難は既述のごとく語るのを省かれていた）。

ちなみに、観音菩薩が三蔵の道心を試す段、童子戯の「観音試練」については、『目連戯』の西天に向かう目連に黒松林で観音菩薩が歓会を逼る一齣（『目連救母勸善戯文』巻中の「過黒松林 観音戯目連」）や【西天取経】の「四聖」との関係を考えるべきであって、世本第 21 回の「黒松林失散〔黄風怪〕」や第 81 回の「黒松林三衆尋師〔地湧夫人〕」との関係を考えるのは見当はずれなのかもしれない。そもそも『目連戯』には『西遊記』と同じキャラクターが登場していた。『目連救母勸善戯文』には猪百介、鉄扇公主、白猿、沙和尚が登場し、火焰山や爛沙河が舞台となっていた。『西遊記』と『目連戯』は同根より生じた兄弟のような存在だったに相違ない。『目連縁起』（P2193）、『大目乾連冥間救母変文并図一卷』（P2614 他）などの存在を考えれば、目連の物語が西遊記物語に先行して存在したことは疑えないが、それらには地獄めぐりの趣向はあっても、羅卜の西天行は存在していなかった。しからば、それは西遊記物語から趣向を取り込んだに相違ない。『西遊記』は小説となったがゆえに『目連戯』との不即不離の関係を断ち切れたが、『目連戯』は演劇であるがゆ

えにそれができなかつたのではなかつたか。

話帰正題、それなら【西天取経】と曹琳本、朱黄本はいかなる関係にあるのか。ここで視点をかえ、花果山が原『西遊記』ではどこにあるとされていたかについて考察してみたい。『大唐三蔵取経詩話』の「行程遇猴行者処第二」では白衣の秀才が「従正東而来」とされており、いかにも三蔵一行六人の後を猴行者が追って来たかのごとく書かれているが、花果山の位置は明らかにされていない。『西遊記』雑劇の花果山紫雲羅洞を根城にする孫行者は、観音菩薩に「庄在花果山下」されている。花果山は行者が王女をさらった火輪金鼎国にあったかと思われるから、取経の旅の順路に設定されていたはずである。『朴通辞諺解』には二箇所で「西域(有)花果山」とあった。しからば『西遊記』の【大鬧天宮】の原型は、『大唐三蔵取経詩話』と『西遊記』雑劇の間、すなわち宋から明初の間、西遊記物語の隊列に加わったが、当初の花果山は西方に置かれていた可能性が高いことになろう。それが海東傲来国の海中の島に遷されたのは、『西遊記』雑劇にみえている【江流和尚】の原型との関係が考慮されてのことであつたとおぼしい(中国本土の河川はみな西から東に流れると観念されていた)。とはいえ、悟空が封じ込められた山をまるごと海東に移すのはさすがに難度が高かつたとおぼしく、当初の花果山は五行山、さらには両界山と名を変えてそのままとの場所に残し、【江流和尚】にふさわしい山が新たに新花果山として選定されることになったようだ。譬喩的というなら、【西天取経】のとぼ口の花果山と霊山間近の弱水は、いずれも分身が作られ、むしろそちらの方が本体以上に目立つことになつたのではなかつたか。

ひるがえって、「金角銀角」は先行文献のいずれにもみあたらないから、【世徳堂本西遊記】に近い時点で創作され【西天取経】の難の隊列に加わつたものとおぼしい。にもかかわらず、金角、銀角の名をあえて六盤山に加えた曹琳本は、後世の童子のさかしらを示すものに過ぎまいが、「金角銀角」の存在しない曹琳本(や朱黄本)それ自体は「金角銀角」が創作される以前の西遊記物語の面影をとどめるものであつたのかもしれない。

## 十一 童子戯の西遊記物語(三)—童子戯の変容

童子戯の〈唐僧取経〉と『西遊記』の【西天取経】の比較検討には興味の尽きないところがあり、詳しく論じたいところであるが、全面的な検討については機を改めることとし、最後にいくつかの点についてのみ、以下に指摘しておくことにしたい。

まず指摘すべきは、曹琳本と朱黄本は大筋において一致しているが、相違点も少なくないという点である。これはある意味自然な現象といってよい。なぜなら朱黄本、曹琳本の原本は師承あるいは文革によって一時は失われたものを記憶により再現した抄本であつて、そうした抄本は同業者に対しても秘匿して見せないものであつたらうからである。それゆえ伝承の間に生じた相違がそのままになっていたり、意図的に変更されていたりする場合が少なからずあつたらうからである。

次に指摘すべきは、上記と密接に関係するのであるが、〈唐僧取経〉は【西天取経】に比し圧倒的に規模が小さいという点である。【西天取経】と同規模のものが、口承はもちろん手抄であつても何世代にもわたって伝わるのは難しか

ろう。それゆえ両者に共通する難であっても、前者が後者に比し簡単なものとなっていることはいまでもない。細部が異なっていたり、難の順序も両者の間のみならず、朱黄本、曹琳本の間でも異なっていたりするが、昔日と異なり大規模な童子祭祀儀式などおこなわれなくなった 20 世紀以降においては、施主の求めに応じ簡略版やそのさらなる簡略版がおこなわれるようになるのは自然な流れであったろう。宋代には 7 日間をかけて演ぜられた目連戯も明の鄭子珍の『目連救母勸善戯文』では 3 日版に縮小されていた。

〈唐僧取経〉は【西天取経】を簡略に引き写したものに過ぎないと考える方もおられよう。筆者もそうした部分、さらには改変した部分もあるであろうことは否定しない。とはいえその場合でも、難の順序を変更するのはまだしも、内容まで変える必要はさしてなかったはずと考えている。

童子が道壇で祭祀儀礼をおこなう際、サービス精神から施主らがよく知る『西遊記』以外の物語を加えたり、それに言及したりすることはあったろう。たとえば、朱黄本の〈唐僧取経〉には【西天取経】にない老鼠山の難が「火焰山」の後に語られている。若い娘に化け三蔵に毒を盛ろうとした鼠怪が悟空に見破られて退治されるというもので、内容的には単純なものであるが、その最後に、母老鼠が一匹逃げ出し、後に五匹の鼠が東京を騒がせたとしているのが目を引く（後来五鼠鬧東京）。曹琳本も一匹ではなく数匹の母老鼠とするものの、朱黄本と同様に述べる（後来合会興人馬，五鼠行兵鬧東京）。ところがその棲家を老鼠山とせず白骨山としている。両本での鼠怪のふるまいは、白骨こそ残さなかったが【西天取経】の「白骨夫人」そのままであった。ここでいう「五鼠鬧東京」は安遇時編の『全補包龍凶判百家公案』や完熙生編の『新鍔全像包孝肅公百家公案演義』の第 58 回に、「決戮五鼠鬧東京」として収められているもの（ならびに『龍凶公案』の「玉面猫」）を念頭においていると思われるが、両本ともその具体的な内容を語っているわけではない。この老鼠山（白骨山）の鼠怪は、かつていずれかの童子により白骨夫人を鼠怪にかえて語り始められたものであって、その際に鼠の縁で「五鼠鬧東京」が持ち出されたのではあるまいか。

朱黄本は老鼠山の難に引き続いて白雲山の狼妖怪を登場させる（遇見一個狼妖怪）。ところが読み進むとこの妖怪、実は狼ではなく白羊だったとの記述がでてきて面喰らわされる（原来是個白羊精）。狼 lang と羊 yang は発音が近いから、いずれか一方が誤りかとも思われるが、いずれが正しいかはさだめがたい（老抄本では狼が狼になっているが、これは明らかに狼の誤記ないしは翻字の際の誤りに相違ない）。いずれにせよ、白雲山である以上白羊でなければ白狼でなければなるまい。ところが曹琳本は既述のごとく先の鼠怪の棲家を白骨山としていた。これに対する朱黄本は白骨山に白夫人なる妖怪がいたとっていた（白骨山収白夫人）。【西天取経】の「白骨夫人」は『大唐三蔵取経詩話』の「過長坑大蛇嶺第六」の「山頭白色枯骨一具如雪」の火類坳（「明皇太子換骨之处」とされる）と引き続く白虎精を綯い交ぜにしたもの（火類坳白虎精）であり、関連する伝承に宋・王銍『黙記』巻上にみえる「玄宗之髑髏骨」とされる「玉髑髏」の記事があるが、世本の【西天取経】は白骨夫人の棲家を白骨山とも白骨嶺ともせず、楊本、朱本ともども白虎嶺とする<sup>44</sup>。さらに朱黄本の

44 車王府には様々な曲本が所蔵されていた。『清蒙古車王府藏曲本』（北京古籍出版社、

白雲山では八戒が狼妖怪に婚姻を迫られた娘に化けるが、あまりに無様なので悟空が「一口法水噴了去」し変身を援ける下りがあり、通天河の難を彷彿とさせる。既述のごとく朱黄本は洞庭湖鯉魚精のかつての存在を示唆するが(洞庭湖収鯉魚精)、通天河の難ともども語ってはいなかった。このあたり非常に複雑な変容の過程をへているらしいが、白骨夫人が白虎精から変わったものであるのは確からしい(骨と虎は発音が近い)。

諸般勘案し、筆者は現在以下のように考えている。【西天取経】の「白骨夫人」は白骨ゆえに葬儀や功德の祭祀の場にはふさわしくないと考えられ、過去のいずれかの童子により、施主らもよく知っているはずの五鼠鬧東京との関係をおわせる老鼠山に差し替えられた、と。ちなみに、童子戯には包公坐堂審替×包公告状×包公誤と題される包公ものがあった。

だが洞庭湖の鯉魚精の場合は単なるリップ・サービスとは異なろう。陳家荘はもと洞庭湖の畔にあり、そこでは鯉魚精が人身御供を求めていたはずである。先後は明らかでないが、洞庭湖が鼃のいる弱水と習合し、取経の旅の道半ばの通天河となるや、鯉魚精も金魚精にかわった。それが【西天取経】の「通天河」であって、曹琳本は「通天河」の登場しない当初の姿を一部とどめたもの、朱黄本は鯉魚精による人身御供要求をかつての八戒のふるまいを思わせる狼(白羊)妖怪の強制媚入り要求にかえたものではなかったか。いずれにせよ、南通の童子が通天河を洞庭湖にかえることはなかったろうと筆者は考えている。

## 十二 〈唐僧取経〉で語られない難—朱鼎臣本と楊致和本

童子戯の〈唐僧取経〉と『西遊記』の【西天取経】の比較を通じて指摘すべきこととして、上記二つの指摘と大いに関係するのであるが、最後に最も大切と筆者が考えることを指摘しておきたい。それは両者に共通して語られる難ではなく、〈唐僧取経〉では語られていない難こそが西遊記物語の成長史の検討においては重要であるという点である。

筆者の作成した「世徳堂本・朱鼎臣本・楊致和本【西天取経】ならびに曹琳本・朱黄本〈唐僧取経〉比較対照表」を見ていただければ一目了然であるが、【西天取経】の第一・四半分において〈唐僧取経〉で語られていない難は、位置と規模をかえた「四聖」を除けば「黒熊」「黄風怪」「五莊観」であり、第二・四半分では、既に【修正】の可能性を論じた「白骨夫人」「通天河」ならびにその可能性が残る「老君青牛(烏風洞収青牛怪)」「紅孩児」を除けば「黄袍怪」

---

1991年5月)には説唱鼓詞に「西遊記」(一)～(四六)を、子弟書に「高老荘(6回)」「撞天婚(4回)」「觀雪乍冰(1回)」「子母河(1回)」「芭蕉扇(2回)」「盤絲洞(3回)」「火雲洞(5回)」を収めているが、いずれも『西遊記』が成立して以後のもののみなせる。車王府の『西遊記』関係の曲本には京劇の総講、全串貫や皮影戲のものがあり、京劇関係では「盜魂鈴総講」「指路全串貫」「紅梅山総講」が『西遊記』にみえないストーリーを語っており、首部から肆部がある皮影戲の「西游」の首部では白虎精の棲家が白骨山となっていた。また『俗文学叢刊』(中央研究院歴史語言研究所・新文豊出版股份有限公司、2001年10月、2002年5月、2003年6月、2004年5月、2005年9月)には上記のほか、石派書に「八戒」「通天河」「撞天婚」が、快書に「反天宮」が、南音に【劉全進瓜】が収められていた。

「金角銀角」「烏雞国」「鼉精」「車遲国」であり、第三・四半分では、同じく【修正】の可能性が残る「六耳獼猴(頼宝山収頼猴精)」を除けば「荆棘嶺」「黄眉童子」「稀柿衞」「朱紫国」「獅駝国」と西梁国ならびに蜈蚣の多目怪であり、第四・四半部では、同様「九頭獅子(獅子嶺)収獅怪)」「玉兔(西洋国収女妖怪)」を除けば「比丘国」「地湧夫人」「滅法国」「鳳仙郡」「犀牛怪」「銅台府」となる。以上のうち、【修正】の可能性が残るとした難は、朱黄本の末尾で端折った(抄近説短)とされている難(もしくはそれとおぼしき難)であって、当時存在していたものが実際に端折られたか否か明確ではないものである(とはいえ、字面からみる限り、【西天取経】で関連を推定される難とはかなり異なっているようであるから、一概にその存在を否定することはできないと考える。なぜなら、朱黄本が、すでに流布している『西遊記』を意識してそのように述べたとしても、わざわざ地名などをかえる理由がないからである。それゆえ本論では可能性が残るとし、後放に俟つこととした)。なおまた、上掲の難のうち、下線を施した「黒熊」以下は『礼節伝簿』にみえており、遅くとも万暦2年までには【西天取経】の難の隊列に加わっていたと推察される難である。

以上において、唐僧取経では語られていないとした諸難の多くには、観音菩薩(ならびに太上老君)とこれに親しい菩薩や神仙が登場していた。逆に、共通する諸難のうち、悟空ら後に三蔵の弟子となる者を収伏する難を除けば、菩薩、神仙の類が登場しないものが多かった(登場するものもあるが、それらは後に【修正】された可能性が高い)。【西天取経】の「女人国」の落胎泉に登場する、紅孩児を舎姪、牛魔王を兄弟とよぶ如意神仙も、朱黄本ではただの仙翁とされていたし、如意真人の名が与えられている曹琳本でも親族関係への言及はなかった(楊本は曹琳本に一致し、朱本はこれに加えて「牛魔王哥」とする)。諸般勘案するに、最も古い原『西遊記』は、もともと第一・四半分に置かれていた諸難などに加え、白骨夫人、洞庭湖鯉魚精、女人国と蝸子精、火焰山、九頭鳥、蜘蛛と蜈蚣などの難のみで成り立っていたのではなかったかと推察されるのである。

ここで世本と、これとの先後関係がこれまでさまざまに論ぜられてきた、朱鼎臣本(朱本)10巻(67則)と楊致和本(楊本)4巻(40則)との関係につき、簡述しておきたい<sup>45</sup>。三者の最も大きな相違は【江流和尚】の存否にある。楊本は世本同様【江流和尚】を欠くが、朱本には江流児故事の無い【江流和尚】が存在しており、南極星君が直接殷小姐から赤子の三蔵を預かっている。【西天取経】部分についていえば、朱本、楊本とも世本の順のままに難が挙がっているが、その前半の難は比較的詳しく、後半の難にゆくほど簡潔になっている。なかでは朱本に楊本に存在する「烏雞国」「車遲国」が存在せず、「老鼉作祟」があるのに、「通天河」がない点が目を引く。この点につき、太田辰夫は朱本の編

45 世本、朱本としては、同じく高崎藩大河内家旧蔵で、村口書店をへて北京図書館に移り、現在は台北の故宮博物院図書館に蔵される『新刻出像官板大字西遊記』20巻100回(『擬備中国書目』№2192)と『鼎鏤全像唐三蔵西遊釈厄伝』10巻(同№2191、上図下文、下文每半葉10行17字)を、楊本としては『明清善本小説叢刊』所収の朱着嶺本『新鏤三蔵出身全伝』4巻を使用した。なお朱本と楊本はいわゆる分則本で、則数の表示はない。ちなみに『四遊記』本の『西遊記』では41回となっている。

者が楊本の「烏雞国」を省き、「車遲国」「通天河」を削除したと述べている<sup>46</sup>が、果たしてその通りなのか、以下に具体的にその状況のみておきたい。

現存最古の楊本とされる朱蒼嶺本『新鍔三蔵出身全伝』(上図下文, 下文每半葉 10 行 每行 19 字)では、卷 3 第 24 葉裏第 1 行から「唐三蔵夢鬼訴冤」、即「烏雞国」が始まり、卷 4 第 4 葉表第 1 行から「唐三蔵収妖過黒河」、即「紅孩児」と「黒河」が始まっている(この間が「烏雞国」に相当する。なお以下でいう楊本は朱蒼嶺本のことである)。加えて卷 4 第 3 葉裏の最後の 2 行に見える詩、「獅転玉(五)台山上去、宝蓮座下聴談経、雖是妖怪将人害、亦是国王有災星」を、朱本は「孫行者収伏妖魔」、即ち「金角銀角」の末尾の下場詩の後に、「又」として、第 1 句の「獅転」を「妖転」に、第 4 句「亦是国王有災星」を失韻の「老君収回諸天界」として収めている(ちなみに『四遊記』本の『西遊記』は、第 1 句を「収転青獅中土去」とするが、第 4 句は楊本と変わらない)。玉台山を五台山の誤刻とみなす論者に、この下場詩を朱本の第 4 句により「金角銀角」の下場詩で、楊本はそれを「烏雞国」のものごとくを改めたと主張する者がいるが、五台山が文殊菩薩の霊場であることは周知の事実であるし、「玉(五)台山」が朱本、楊本でかわらない以上、この詩は「烏雞国」の下場詩で、朱本が「烏雞国」を削除したおり、そのみ「金角銀角」の下場詩のごとく改め、「又」としてその後においたとみるのが至当であろう。

諸般勘案するに、朱本のもとづいたテキスト(朱蒼嶺本にその部分が備わっており、上記の状況からみて、それが朱蒼嶺本ないしはそれと同版式の版本である可能性が高いから、以下では朱蒼嶺本の祖本であり、朱本の祖本である可能性もあるこの每半葉 10 行 每行 19 字のテキストを【楊本】と表記することにす。五台山を玉台山と誤刻する以上、朱蒼嶺本を祖本とはいえない)に欠葉があり、朱鼎臣はかろうじて残っていたその「烏雞国」の下場詩のみ杜撰に利用したとみておきたい。

次に「車遲国」と「通天河」に関する状況を検討してみよう。楊本では卷 4 第 8 葉裏の最終行から「唐三蔵収妖過通天河」が始まり(則目のみ)、第 9 葉表第 1 行冒頭の「却説師徒過了黒河」を承け「行至車遲国中」と「車遲国」、続いて「通天河」となるのだが、朱本では楊本の第 14 葉表の「通天河」が終わる「老鼈下水。師徒又行不多時」までを省き、いきなり次の「又到一山」に繋いでいる。「車遲国」は『朴通辞諺解』にも『礼節伝簿』にも見えており、この部分に関しては朱本が意図的に削除した可能性も考えられるが、「通天河」を省くと最後の「老鼈作祟」が浮いてしまう(質問の依頼がなければ答えを忘れようがない)。現存の朱蒼嶺本は最後の「唐三蔵取経団円」が冒頭の 2 行しか存在しておらず、以下欠葉となっていて、第 81 難すなわち「老鼈作祟」の詳細は明らかでないが、老鼈の質問依頼自体は存在している。人民文学出版社

46『西遊記(上)』(『中国古典文学大系』第 31 卷、平凡社、1971 年 10 月)の「解説」による。なお太田の、この解説以前に発表した「《唐三蔵西遊伝》考」(『神戸外大論叢』第 17 卷第 4 号、1966 年 8 月)では、世本と朱本の間には前後的な継承関係はなく、「ともに《西遊釈尼伝》と呼ばれる膨大かつ詳細な不分回本《西遊記》から出たもので、《唐三蔵西遊伝》は多刪不改本、世徳堂本は少刪有増本」であって、朱本と楊本の関係は「楊本は朱本の影響を受けているが、両者には直接的な継承関係はないらしい」と、まったくといってよいほど異なる説を唱えていた。

の近文堂版で聚古齋から梓行された単行本に依拠した排印本(中国小説史料叢書本、1984年5月)によるなら、失われた朱蒼嶺本の末尾は、下場詩がある以外、朱本と同じであったようだから(近文堂版の下場詩は1首、『四遊記』本は2首)、「老龜作祟」自体は存在したはずである。しからば朱本に「通天河」がないのは、ケアレスミスでなければ、削除したのではなくもとづいたテキストに欠葉ないし判読不能な部分があったためであったろう。

朱本には【楊本】を承け継げなかったとおぼしい箇所が少なくとももう2箇所ある。ひとつが、朱本の「三蔵歴尽諸難已満」が「九頭獅子」を語り終えたのち、「又行数日、来到金平府慈雲寺借歇。喫齋已畢、夜同本寺一年尊長老在後堂坐下…」と続き、この間の楊本ではおよそ1葉分にあたる「犀牛怪」が欠落している箇所である。楊本ではその前に、「又到金平府慈雲寺住、正值正月十五日…」以下の一段があって、玄英洞の犀牛の難が語られ、それを承け、「行到布金寺借歇。喫齋已畢、夜同本寺一年尊長老在後堂坐下…」と「玉兔」が始まっている。朱本は楊本ないし【楊本】に拠り版下を作成する際、金平府慈雲寺の段を、布金寺の金に目移りしてうっかり飛ばしてしまったのではあるまいか。

いまひとつは、朱本のみならず楊本も承け継げなかったところで、楊本、朱本の後半のどちらが先行し他方の依拠した版本であったのかという観点からこれまでもしばしば論ぜられてきた、「唐三蔵収伏猪八戒」の「話分両頭、又聴下回分解」に続く韻文以下の箇所である。楊本によれば、この韻文、最初の三句は第19葉裏最終行にあり、第4句目の「虎豹皆作御」以下は第20葉の表に収められている。しかもこの第4句以下はまったく同文が世本にも見えているのに、それ以前の世本では15句にも及ぶ部分については、上記のごとくわずかに3句になってしまっている(世本の第1句と第9句が楊本、朱本の第1句、第3句に類するから、三者の間になんらかの関係があることは確かである)。筆者はこの間の状況の由来を以下のように考えている。【楊本】の第19葉の最終行には本来烏窠(窠)禪師のための則目があり、第20葉以下でそれが語られ、禪師の予言の韻文が途中まで語られたところでその葉の裏が終わり、その後現第20葉以下が続いていたのだが、その本来の第20葉以下の版木が失われてしまった。そこで朱蒼嶺本は第19葉裏最終行の則目にかえ、残された現第20葉の韻文に合わせ3句を捻りだしてそこに埋め込み、以下の版心の数字については修正した、と。ただし朱蒼嶺本の当該部分には埋木改刻の痕はみえないから、朱蒼嶺本は版式こそ【楊本】を襲ったが、(少なくとも一部は)新たに刻された版木で印刷されたものであったろう。朱本の依拠した版本を楊本とせず【楊本】とする所以である。

では「虎豹皆作御」以前の【楊本】の韻文と世本にみえる韻文との関係はどうであったのか。確かなことはいえないが、筆者は同じであった可能性もあると考えている。なぜならそこに「虎豹皆作御」とは対句になる「獅象尽称王」があり、それが明らかに獅駝国の難を指しており、楊本、朱本とも簡略ではあるがそれを語っていたからである。もちろんこの句が【楊本】で新たに難の隊列に加わった獅駝国にあわせ、【世徳堂本西遊記】または世本により挿入ないし修正された可能性も否定できない。残る14句が示唆する難、たとえば「青狼為主簿」に相当する難が世本に見あたらないからである。よって、この間の経緯についても後致に俟つこととしたい。

余談であるが、しばしば繁本が簡本に先行するとの根拠に持ち出される、繁本を刪略して簡本とするのは容易だが逆は難しいとの主張は、あらずじのみ記されているとされる難がそれまでまったく語られていなかったことを前提としているとおぼしいが、長期に亘って口頭で語られてきた物語にもとづく『西遊記』のごとき長篇小説の本質を理解していない主張といわざるをえない。そうした作品が、印刷文化が未発展で、読者層、購買層が十分に育っていない時点で、『紅樓夢』や『儒林外史』のような近代の小説のごとく、いきなり長篇小説として執筆され出版されたなどと考える方がおかしい。現存していなくとも、百回本以前に、そのもととなった、『三国志平話』のごとき小規模な印刷物が存在していたことは先ず以て確かである。『大唐三蔵取経詩話』にせよ『宣和遺事』にせよ、語りの場ではそれが一言一句その通りに語られていたわけではなく、何倍何十倍にも膨らませて語られていたはずであって、そこにあらずじしか書かれていなかったとしても、そのもとになった語りが簡単だったことにはなるまい。また、繁本が刊行された後も、それ以前のそうした印刷物やそれに毛の生えたようなものが再刊されることもあったろう。語りの内容も、俗文学にみえる西遊記物語に『西遊記』に見当たらない内容にもものがあるように、時々刻々変容を遂げていたはずである。

閑話休題、太田辰夫は慧眼にも、朱本の「前半と後半とでは本質的な差異」があり、朱本巻7第45則まではかなり詳細で、「世本第十四回までと字句さえも一致する部分がきわめて多く、両者に密接な関係があることを示している」が、後半巻8、巻9は「分則も則目も本文の字句も、ほとんど楊本と一致する。これは朱本の編者が楊本を借用し始めたためらしい」とした。太田は楊本について、根拠は不明ながら「世本よりも早いテキストを省略したものとわたしは推測する」とし、世本、朱本、楊本の関係を、「要するに朱本の刊行は楊本の後であるが、この二本と世本との刊行の前後は決定しがたい」<sup>47</sup>としている。

### 十三 原『西遊記』(一)—第1期と第2期

世本、朱本、楊本の間関係であるが、卑見では朱本の後半が楊本(朱蒼嶺本)か【楊本】から引き写されたものであることに問題はないから、あとはひとえに太田のいう朱本の前半と世本との「密接な関係」如何に係ってこよう。

朱本の「度孤魂蕭瑀正空門」には三蔵の生立ちを紹介する韻文があり、そこには「出身命犯落紅(江)星，順水順波逐浪決，托孤金山有大縁，法明和尚将他養」とあった。「順水順波逐浪決」は江流児故事の存在を示唆するものであるから、それに触れない本文とこの韻文は抵触することになる。この韻文は、字句に多少の相違はあっても、世本を含むすべての百回本明本の第11回に存在

47 太田の『西遊記』の「解説」は、いずれも平凡社より刊行された、1971年初版の『中国古典文学大系』第31巻に附載のもの、その1975年の第7刷、1979年第9刷での改訂版、1980年11月の「奇書シリーズ」(愛蔵版)第9巻の改訂版があり(1981年2月7日付筆者あての私信による)、ここではその最後のものによっている。ちなみに最後の部分は、1971年版では「要するに朱本の刊行は楊本の後であるが、三本ちゅういちばんおそいとおもわれる」となっていた。なお大系とした部分は私信では全集となっていた。全集の解説は見えていない。

しており、そこでは「出身命犯落紅(江)星，順水隨浪逐浪決，海島金山有大縁，遷安和尚將他養」となっていた。【世徳堂本西遊記】におけるこの韻文の存否は明らかにしがたいが、そこでも存在していたか、削除されており、その【江流和尚】の内容を要約説明するため世本で新たに作成されたかのいずれかではなかったかと考えている。

案ずるに、朱本は【江流和尚】を欠く明本のいずれかにより、その三蔵を紹介する韻文については一部変更したもののそのまま残し、削除された【江流和尚】の本文については、この韻文などを参照しつつ復活させようとした。その際、匣が金山に漂着し赤子も無事だったとするのはほとんどありえない設定と考え、南極星君が仲立ちをして直接金山の長老に赤子を手渡したと変えた。長老の名を遷安から法明にかえた理由はさだかでないが、法明と伐明は当時の普遍的な音では同音になっていたという<sup>48</sup>から、南明時代の清朝統治下の刊本であることを示しているのかもしれない。「海島」を「托孤」に差し替えたのは、金山は海島ではないと考えたからであろうが、如上の想定通りなら、【世徳堂本西遊記】が金山を海島と表現していたかもしれないことの方が問題にされてしかるべきであろう。

金山寺のある金山は鎮江にあり、今は長江の南岸にとりこまれているが、もとは南岸近くの島であったから、海島と称することはできない。とすれば三蔵が【世徳堂本西遊記】で漂着した島は、いわゆる金山ではなく、東海中（の金山ともよばれる？）島だったとされていたのではなかったか。筆者はそれを雲台山ではなかったかと考えている。江蘇省の沿岸には北に向かう沿岸流があり、雲台山に三元宮を創建するため南京で購入され、いったん瓜儀に集められて江に浮かべられた万木が、日ならずしてそこに到着したという神運の物語<sup>49</sup>もあったから、江流児の神性を強調するには最適であったかもしれない。そうすると【世徳堂本西遊記】即魯府本であった可能性もでてこよう。

次に論ずべきは楊本もしくは【楊本】が世本以前のものか否かであろう。それを検討するに先立っては、楊本に【江流和尚】が存在しない点について考えてみる必要がある<sup>50</sup>。

---

48 太田辰夫『唐三蔵西遊伝』(朱本)考(『西遊記の研究』所収)による。原載は『神戸外大論叢』第17巻第4号、1966年8月。なお僧の名は『西遊記』雑劇では丹霞禪師、呉昌齡劇では平安、世本、楊本、明伝奇の『宋元戯文輯佚』所収の『陳光蕊江流和尚』では遷安、朱本や汪本(『西遊証道書』)では法明、汪本を除く清刊本では法明、遷安を混用するという(太田辰夫「戯曲西遊記考」、『西遊記の研究』所収。原載は『神戸外大論叢』第22巻第3号、1971年8月)。ただし混用ではなく修正の不徹底であろう。

49 乾隆『雲台山志』巻5芸文所収の顧乾「無相上人伝」や、嘉慶『海州志』巻25人物伝第二・方伎の釈徳証伝、巻31拾遺録第五・拾遺二所引「李晋元東海志」にみえる。

50 楊本にはまとまったパーツとしての【江流和尚】は存在しないが、三蔵が推挙され太宗の御前で水陸道場を主催することに決まった際に、その出自が簡単に紹介される部分がある。以下にその江流児故事に関わる部分を引いておく。「…洪欲除根，急令淹死。小姐再三哀告，將兒入匣拋江，流至金山寺，大石擋住，僧人聽見匣內有聲，取來開匣，抱入寺去，遷安和尚養成。自幼持齋把素 因此号为江流児 法名喚做陳玄奘…」。一見して明らかなように、金山寺の和尚の名が朱本の法明和尚とは異なり世本を含む

筆者が本論で想定する【世徳堂本西遊記】には【江流和尚】が存在したことになる。否、世本に先行し、それが韻文でその存在を示唆する【江流和尚】が存在する刊本を【世徳堂本西遊記】と定義していた。繰り返すことになるが、【世徳堂本西遊記】といっても世徳堂から刊行されたとは限らないし、その【江流和尚】以外の部分の規模、内容は、世本と同じであった可能性が高いと考えているが、それ以外の可能性を排除しているわけではない。【江流和尚】の内容についても清代の刊本と同じと思っているわけでもない。否、むしろ違っていた可能性が高いと考えている。のみならず、【大鬧天宮】【唐太宗入冥】についても同様の可能性を考えている。つまり【世徳堂本西遊記】には大きくって二通りの可能性があり、ひとつは世徳堂本に【江流和尚】を加えたにすぎないもの（ただしその部分の内容についてはさまざまに考えられる）であり、もうひとつは【大鬧天宮】【唐太宗入冥】【西天取経】についても大幅ないし小幅に【修正】される以前の様相を留めているものがそれである。

ひるがえって、楊本には【西天取経】の「五莊觀」「通天河」「老君青牛」「獅駝国」に相当するものがすべて収められていた。卑見によれば、このうち、「五莊觀」以外は世本に近い時期の『西遊記』で初お目見えしたはずの難であった。ならば、楊本の前半を「世本よりも早いテキストを省略したもの」と推測するより、魯王府本と同一か否かは別として、世本や【世徳堂本西遊記】に近い時期の原『西遊記』そのものと想定することも可能なのではあるまいか。しかしあくまで世本を省略したもの、すなわち世本の簡本とみることもまた不可能ではあるまい。このままでは卵が先か鶏が先かという水掛論争になってしまう。

この状況を打開する可能性を秘めている西遊記物語が童子戯の〈唐僧取経〉であると筆者は考えている。すなわち、【西天取経】の「五莊觀」「通天河」「老君青牛」「獅駝国」に相当する難がすべてみあたらない西遊記物語があったなら、それは世本や【楊本】より古い時代の原『西遊記』の姿を留めたものなのではないのかと考えるのである。数ある難のうち、上記の四つの難が狙い撃ちで世本から省かれる理由をあえて考えるなら、規模が大きく紙幅削減効果が大きいくらいしか考えられないからである。それくらいなら、この「五莊觀」を除く三難（を含めたいくつかの難）が、ある時期に一括（あるいは段階的に）増補されたと考えてみてはどうか。この考え方によれば、上記の難のすべてがみえない童子戯の〈唐僧取経〉は、最も古い時代の原『西遊記』（以下では仮にこれを第1期原『西遊記』とよんでおく）ないしはその面影をよく留めたものということになるはずである。

『朴通辞諺解』には「車遅国」のあらすじが問答体で紹介されている一節があり、本文の「這般遠田地裏，經多少風雨寒濕，受多少日炙風吹，過多少惡山陰水難路，見多少怪物妖精侵他，撞多少猛虎毒虫定害，逢多少惡物刁蹶」に以下のごとき註が附されていた。

今按法師往西天時，初到師陀国界，遇猛虎毒蛇之害，次遇黒熊精、黄風怪、地湧夫人、蜘蛛精、獅子怪、多目怪、紅孩兒怪，幾死僅免。又過棘鉤洞、火炎山、薄屎洞、女人国及諸惡山陰水、怪害患苦，不知其幾。此所謂刁蹶也。

---

明本に一致している。

詳見西遊記。

ここに挙がっている難のうち、師陀国が世本の「双叉嶺」にあたるものであり、後に表記も内容も位置もかえて「獅駝国」になったであろうことはすでに述べた。棘鉤洞は「荊棘嶺」、薄屎洞は「稀柿術」の前身であろう。獅子怪の候補はいくつかあるが、「車遅国」の青毛獅子か竹節山の九頭獅子のいずれかと思われる。本文中に原文が引かれる「車遅国」を第一候補、「九頭獅子」を第二候補としたい。もちろんここに挙がっている難が『朴通辞諺解』で言及されている『西遊記』の【西天取経】にみえる難のすべてである保証はないが、『朴通辞諺解』の編者崔世珍(?-1542)生存当時の原『西遊記』がこの程度の規模のものであった可能性もまた否定できまい。『朴通辞諺解』に見える『西遊記』関連の記載について初めて本格的に論じた<sup>51</sup>太田辰夫は、それを元本(甲)、『永楽大典』所引の「夢斬涇河龍」を元本(乙)とよび、これを承けた趙景深は、元本(甲)にあたるものを「西遊記平話」とよんだ<sup>52</sup>が、筆者はこれを第2期の原『西遊記』とよびたい(太田のいう元本(乙)は【西天取経】相当部分がまったく不明なため、ここでは論じない)。

俗文学文献のうち、『西遊記』との関係が夙に言及されたものに宝巻があることは既述した。蔡鉄鷹の『西遊記資料彙編』はそれを集成しているが、そこで「明代弘治、正徳間興起的民間宗教羅教的経巻」で「可能起自嘉靖初年朝廷佞道背景下的羅教」の術語が現れているとする宝巻に『銷积真空宝巻』があり<sup>53</sup>、そこに以下のごとき記載があった。

将領定孫行者齊天大聖	猪八戒(戒)沙和尚四聖随根
正遇着火焰山黒松林過	見妖精和鬼怪魍魎成羣
羅刹女鉄扇子降下甘露	流沙河紅孩児地勇(湧)夫人
牛魔王蜘蛛精設入洞去	南海裏觀世音救出唐僧 ……
滅法国頭神通僧道闍聖	勇師力降邪魔披髮為僧

51 「朴通辞諺解所引西遊記考」(『西遊記の研究』所収。原載は『神戸外大論叢』第10巻第2号、1959年10月)。なお太田によれば、『朴通辞諺解』に言及した太田以前の先学の論文に、豊田穰「朴通辞諺解の刊行について」(『斯文』第26篇第3号、1944年3月)、小川環樹「西遊記における呉承恩の改作」(『東光』第8号、1949年3月)、楊聯陞「老乞大朴通辞裏の語法語彙」(『中央研究院歴史語言研究所集刊』第29本、1957年11月)があり、豊田はこれをもって『西遊記』百回本の祖本にあたる「平話西遊記」の存在を推している。

52 「談西遊記平話残文」(『文滙報』1961年7月8日)。太田の元本(乙)にあたる『永楽大典』の「(魏徵)夢斬涇河龍」につき、孫楷第は『中国通俗小説書目』(中国大辞典編纂處・国立北平図書館、1932年3月)で「旧西遊記」とし、「語意大似話本」としている。

53 ここで蔡鉄鷹は、弘治あるいは正徳、嘉靖を羅教の隆盛期や特定の用語が使用され始めた時期といているのであって、『銷积真空宝巻』の成立時期や刊行時期をそのように述べているわけではない。筆者の俗文学文献についての見方は「一 俗文学文献における西遊記物語」で述べた通りであるから、『銷积真空宝巻』の成立、刊行時期が確定すればより精密な議論が可能になるものの、仮にそれが清代であっても議論の筋に影響はないと考えている。

兜率天彌勒仏願聴法旨 極楽国火龍駒白馬駝經  
 從東土到西天十万余里 戲世洞女人国匿了唐僧

稀柿術が戲世洞の異表記であり、「勇師力降邪魔披髮為僧」が「車遲国」の鹿力大仙と悟空の「隔板猜枚」を、「兜率天彌勒仏願聴法旨」が黄眉童子を彌勒仏が捕えたことを指すとみるのは許されようし、「極楽国火龍駒白馬駝經」も難ではなく取經を成し遂げた後の帰路のことを述べたものとみれば、そこに挙がっている難は登場順こそ異なるものの、【西天取經】に見える難の範囲に収まっている（榆林窟第三窟唐僧取經図は、水域をはさみ普賢菩薩を遥拝する三蔵、悟空と經を積んだ白馬を描いている）。しからば宝巻にみえる西遊記物語も、先に『朴通辞諺解』により第2期の原『西遊記』として想定したものと趣向の細部に相違はあっても、内容に大差はなかったように思われる（『銷釈真空宝巻』以外の宝巻にみえる難も同様といえる）。加えて、いずれの宝巻にも上記の「五莊觀」以下の難への言及はなかった。よって筆者はあえてそれらを第3期原『西遊記』に措定する必要はないと考えている<sup>54</sup>。

これまで縷々述べてきたが、上記の「五莊觀」以下の難は、観音菩薩や太上老君が活躍する大規模な難であった。筆者は、そうした難が存在し、なおかつ規模的には世徳堂本に一籌を輸す『西遊記』が存在したなら、それこそ【世徳堂本西遊記】に成長する以前の、その基礎となったもの、もしくはその試行本であり、第3期以降の原『西遊記』とみなしてよいものではないかと考えている。

#### 十四 原『西遊記』(二)—第3期、第4期、第5期

現在筆者が第3期の原『西遊記』とみているのは、『礼節伝簿』より窺い知ることができる原『西遊記』である。既述のごとく、『礼節伝簿』は封面の記載により万暦2年1月13日に「抄立」されたものとされているが、筆者はそれ以前の抄本の重抄本である可能性や、万暦2年の抄本の重抄本であって、抄写の際に追加修正がおこなわれた可能性なきにしもあらずと考えている（既述の影印本に拠れば、封面には「選沢堂 曹国宰誌」とあるのに、本文冒頭の「周樂星図本正伝四十曲宮調」には異筆で「国□賽記」とあり、寒声らの翻字註釈稿は□を宰とみたうえで、「“国宰賽記”四字与全文的字体、墨色不同、顯係後人添入。宰字也是憲字改的」とする。影印本による限り、□字は判読不能だが、寒声らは1986年当時『礼節伝簿』を所持していた1908年生の曹占鰲、1925年生の曹占標兄弟の19世祖の曹国宰と認定したようであるが、曹国憲につい

54 太田辰夫は「『銷釈真空宝巻』に見える「西遊記」故事—元本西遊記考—」（『神戸大論叢』第15巻第6号、1970年11月）で「『銷釈真空宝巻』に見える「西遊記」と、『朴通辞諺解』に引かれる「西遊記」とは、同一の系統のもの」であるが、「『銷釈真空宝巻』の「西遊記」のほうが古い点を有することは疑いない」としている。ただし太田は『西遊記の研究』所収の「『朴通辞諺解』と『銷釈真空宝巻』」では、「この宝巻の成立年代は姑く置き、そこに反映している西遊記のストーリーは、明本西遊記以後のものでは絶対にありえず、『朴通辞諺解』に引かれた西遊記と同じ系統のものと推測する」としている。

ての言及はない。単なる書き損じとみたのであろうか)。とはいえ、現状においては、これまでに検討してきた資料と同様、そこに見える難が、「唐僧西天取経一単舞」にみえる、万暦2年以前の原『西遊記』の【西天取経】にみえるすべての難とみなし、この前提のもとに以下の議論を進めざるをえない(なお上記翻字註釈稿はこれを「唾隊戯」とみなしたが、唾は不要のようである)。

第1期の原『西遊記』の【西天取経】に見える難は、世本のその前半に偏っており、後半に見えるものは廖廖たるものであった。第2期には個別にいくつかの難がその隊列に加わったようにみうけられるが、大規模な難や統一的な構想になったと判断できる難がまとまって加わったようにはみえない。これに対し、『礼節伝簿』によって知られる原『西遊記』は、難の数こそまだ世本の半数程度だが、それらの内容は世本とほぼ同一のようであること、「五莊観」がすでにその隊列に加わっていることで、第1期や第2期の原『西遊記』とは一線を画している。よってこれを第3期の原『西遊記』とみなすことにしたい。だが、筆者が注目する「通天河」「老君青牛」「獅駝国」はみあたらないから、観音菩薩がプロモーターとなり、太上老君や神仙仲間の下僚や有縁の動物が実行部隊の妖怪となって三蔵一行に試練をあたえるという構想は、いまだそこに貫徹されてはいなかったようである。なお、そこに世本では「獅駝国」と同じく文殊菩薩の青毛獅子が登場する「烏雞国」が、「獅駝国」に先行して挙がっている点は、【江流和尚】との関係で注目される。

次は第4期の原『西遊記』であるが、成立時期こそ世本に遅れるが、かつて「福州平話西遊記からみる原『西遊記』」<sup>55</sup>で紹介、検討した福州平話西遊記の拠った『西遊記』を考えている。福州平話は、明末清初に柳敬亭の弟子が南明の隆武帝に随い閩に入ったおりに伝わり、弟子に福州語で演唱するようさせたことによりなると伝えられる説唱文学であるが、そのテキストが民国20年代前半に福州で集中的に石印刊行された。そのなかに西遊記物語関係の『李世民遊十殿』と『開天宮』『五行山』『五莊観』『火焰山』の全四冊からなる『西遊記』があった。筆者のいう福州平話西遊記はこの『李世民遊十殿』と『西遊記』を総称したものであるが、本論で主として論ずるのは世本の【西天取経】に相当する部分であるから、その他の部分については上記の拙論を見られたい(なお泉州の傀儡目連では「李世民遊地府」「三蔵取経」と「目連救母」が七天七夜の全本『目連救母』として演ぜられるというが、「三蔵取経」の内容は世本の【西天取経】とも福州平話西遊記の『西遊記』とも相当異なっているようである<sup>56</sup>)。

現存しているものがかつて語られていたものすべてであるとする根拠は福州平話西遊記にもないが、『五行山』の三蔵が初登場する場面の前後にもその生立ちに触れる部分はないから、そこでは【江流和尚】に相当する部分が語られていなかったとみることは許されよう。【西天取経】相当部分にも大小さまざまな世本との異同がみられる。そのいちいちについても上記の拙稿を参照していただくこととして、ごくおおまかにその概要を述べれば、以下のように

55 埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程紀要『日本アジア研究』第3号、2006年3月。

56 沈継生「目連傀儡」中の目連戯」(『民俗曲芸』第78期目連戯專輯(下)、1991年7月)。また同書所収の龍彼得「關於漳泉目連戯」(傳希瞻翻譯)も参照されたい。

なろう。

『西遊記』の第2冊『五行山』では、観音菩薩が取經の者を求めに旅立って以降、悟空が靈吉菩薩の力添えて黄風怪を退治するまでが語られる。世本では第21回までの「劉伯欽」「収孫行者」「収龍馬」「黒熊」「収八戒」「黄風怪」に相当する部分が扱われている。第3冊『五莊観』は、流沙河で沙悟浄を弟子にする段から始まり、烏雞国で国王を救うまでが語られる。世本では第22～39回の「収悟浄」「四聖」「五莊観」「白骨夫人」「黄袍怪」「金角銀角」「烏雞国」に相当する部分が扱われている。第4冊『火焰山』は、第40回に始まる「紅孩児」の段から最終回にいたるまでを語っている。したがって多くの難については駆け足の叙述となってしまっている。この傾向は旅の終わりに近づくにつれ甚だしくなり、例外的に詳しい「火焰山」の段とその余響ともいえる「九頭鳥」の段(世本第62～63回)以後は、記述が上記の石印本で十行に達する難はほとんどない。「滅法国」「銅台府」はそれぞれ1行で片付けられ、「鳳仙郡」にいたってはその名さえ現われない。この第4冊でそれなりのボリュームをもって語られている難は、「紅孩児」「鼉精」「車遲国」「通天河」「老君青牛」「女人国」「蝸子精」「六耳彌猴」「火焰山」「九頭鳥」であり、これにつぐのが「黄眉童子」「朱紫国」「玉兔」であった。

福州平話西遊記は、【西天取經】の後半にゆくほど記述(語り)が大雑把で梗概ともいえないほど簡略なものになる点では、いわゆる簡本の『西遊記』、楊本や朱本と一致するが、【西天取經】の諸難がほぼ出揃っている点、とりわけ筆者が注目している四つの難がすべて出揃っている点が注目される(「獅駝国」などわずか5行だが)。「六耳彌猴」も存在しているから、その依拠した西遊記物語は『礼節儀簿』により想定される第3期のそれ以降のものに相違ない。よって筆者はこの【江流和尚】の存在しない福州平話西遊記の拠った『西遊記』を第4期の原『西遊記』とよぶことにしている(ただし今後【江流和尚】部分が存在することがわかれば、この第4期と以下に述べる第5期は統合されることになる)。その特徴としては、第3期の原『西遊記』と同様、観音菩薩と太上老君のタグがいまだ明確に現われていないこと、七大聖の構想がないことなどが挙げられるが、詳しくは上記の拙論をみられたい。

これに続く第5期の原『西遊記』は当然上記四難のすべてが出揃い、江流児故事が組み込まれた【江流和尚】が存在しているものが期待される。卑見によれば、【楊本】がこれに相当することになる。とはいえ楊本の【江流和尚】は極めて簡略なものに過ぎない。しからば楊本の【江流和尚】は【楊本】のそれが簡略にされたものなのか。ひるがえって江流児故事はないものの、より詳細な【江流和尚】が存在している朱本をどのように考えるのか。楊本は註50に引いたように、三蔵の生立ちを紹介する一節をもって【江流和尚】にかえており、九九八十一難のしほりも存在してはいなかった。よって【楊本】は【江流和尚】の存在を必須としない、【江流和尚】がコンクリートなものとして組み込まれる以前の原『西遊記』であった可能性があることになろう。第4期の福州平話西遊記の拠った『西遊記』と統合される可能性が存する所以である。ひるがえって、童子戯には【江流和尚】に対応する「陳子春」があったが、既述のごとく、龍宮三公主や三官大帝が登場する、【江流和尚】とはかなり異質なものであった。それゆえ第5期の原『西遊記』はそれを嫌い、三蔵については

生立ちの紹介のみですますことにしたものかもしれないし、すでに完成していたその部分を削除していたのかもしれない。

朱本の関係者（も清代諸本の関係者）も【江流和尚】が『西遊記』には必要であり、なおかつそれに龍宮三公主や三官大帝は登場すべきではないという点では認識を同じくしていたとおぼしい。それゆえ世徳堂本で削除された、【江流和尚】を復活させる方策をそれぞれにさぐった。朱本の【江流和尚】は清本の【江流和尚】に先立ち簡本でおこなわれた、そうした試みだったのではなかったか。仮にそうであったとすれば、【世徳堂本西遊記】の【江流和尚】は、龍宮三公主や三官大帝に言及する魯府本またはその系譜を引くものであった、ということになる。いずれにせよ削除と復活を繰り返した【江流和尚】の内容をめぐっては、当時さまざまな考え方があったであろうことが伺えよう。

## まとめ

現在筆者は西遊記物語の成長史につき以下のように考えている。

【西天取経】に相当する部分が存在し、三蔵と孫悟空にあたる猴が登場する最古の文献は『大唐三蔵取経詩話』である。本論では西遊記物語成長史のスタートを『大唐三蔵取経詩話』、ゴールを世徳堂本『西遊記』においているが、ゴールは便宜的なものであって、成長（とよぶか否かには議論があるかもしれないが）はこれで止まったわけではない。『大唐三蔵取経詩話』以後、これに【大鬧天宮】【江流和尚】【唐太宗入冥】に相当する部分が加わり、原『西遊記』ともいうべき西遊記物語が登場してくるわけであるが、上記の三要素にしても、ある時一斉に、【西天取経】と結びついたわけではなかったろうし、その結合の状況もコンクリートなものではなかったろう<sup>57</sup>。よって本論では西遊記物語の核心である、【西天取経】部分の消長に的をしぼって考察を進めることにしたのである。

『大唐三蔵取経詩話』は後の孫悟空とおぼしい白衣行者と沙悟浄の前身深沙神のみ登場し、猪八戒や白馬は登場しない（経函を運ぶ白馬は登場するが龍王の子ではなかった）。深沙神も沙漠に橋を架け一行を渡すものの、従者となったわけではなかった。その後、八戒と白馬が新たに加わり、悟浄も従者となった西遊記物語が登場したはずである。だがこの西遊記物語の存在を示唆する文献は残っておらず、【大鬧天宮】【江流和尚】【唐太宗入冥】のひとつでも加わっていたかは不明であるから、原『西遊記』とはせず、西遊記物語というにとどめておきたい。

次に存在が想定される原『西遊記』は、三人の弟子と白馬は揃っているが難

---

57 20世紀後半以降に出版された俗文学の範疇に属する『西遊記』は、翻刻に際し、【大鬧天宮】と【西天取経】以外の部分を省き、主人公を孫悟空で一貫させる傾向がある。白話本中国古典小説叢刊之十五を銘打つ『説唱西遊記』（河洛図書出版社、1978年8月台排初版）は、整理に際し実施した二つの工作のひとつを、「刪去了唐僧出世、唐王遊地府、劉全進瓜、以及改編者増添的鬪白猿、五魔女等部分（約三十餘万字）」とするし、人民中国以後に多様な芸能から新たに構成された長篇快板書の『西遊記』（花山文芸出版社、1982年10月）は、【唐太宗入冥】部分を省いている。神話は精華だが迷信は糟粕という評価なのであろう。

の数はさほど多くない西遊記物語である。この想定にあてはまるのが童子戯の(唐僧取経)により想定される西遊記物語である。当初の(唐僧取経)には、世本の通天河の金魚の前身とおぼしき洞庭湖の鯉魚と、凌雲渡にかわる以前の弱水、その往復渡河を援け、如来への質問を一行に托す鼈が登場していたはずである。これを筆者は第1期の原『西遊記』とみなしている。

第2期の原『西遊記』として筆者が想定するものは、第1期の原『西遊記』を承け、一方で難の数を若干増やし、他方で第3期以降に増やされたと筆者が推定する難を含まない西遊記物語である。これに該当するものとしては、(【大鬧天宮】と)「車遅国」が増えている『朴通辞諺解』により想定される西遊記物語をあてたい。第2期の原『西遊記』での通天河と洞庭湖、弱水の状況は不明だが、「師陀国」が黒熊精に先立って置かれ、「獅駝国」への言及がない点に鑑みれば、その【西天取経】がいまだ世本のごとき大規模なものになっていないことは明らかである。宝巻によってその存在を推定される西遊記物語もこれと同様なものとおぼしい。

第3期の原『西遊記』としては、【西天取経】の難の数が世本の半数程度まで増え、「五莊観」も加わった、『礼節伝簿』により想定できるものを考えている。ただし通天河を含む道中の水域の状況についてはさだかでなく、「師陀国」はいまだ「獅駝国」への変身を遂げていないようである。

第4期の原『西遊記』としては、筆者が注目している四つの難を含む【西天取経】の諸難の大半が出揃っているものを想定しており、福州平話西遊記が依拠した、【江流和尚】を取り込んでいない西遊記物語がこれに相当しそうである。とはいえ第4期以前の原『西遊記』は主に口頭の語りにより流布していたと考えられ、語り手もその【西天取経】部分については融通無碍な対応をとっていたとおぼしく、その全貌を知ることはなかなか難しい。

第5期の原『西遊記』としては、【江流和尚】と「五莊観」「通天河」「老君青牛」「獅駝国」が勢揃いし、世本にみえる、【西天取経】のそのほかの難についてもおそらく出揃っていたが、その一部、特に第四・四半分の難については、いまだあらすじの程度しか書き込まれていないテキストを想定しており、具体的には【楊本】がそれではないかと考えている。

これに続くものとしては上記の難へ最終的な【修正】がなされ、九九八十一難のしぼりが加わったものが想定される。それが【世徳堂本西遊記】であり、そこから、【江流和尚】部分を省いたものが世本のように筆者は考えている。ひるがえって、いわゆる魯府本であるが、第5期原『西遊記』か【世徳堂本西遊記】のいずれかと考えられるが、楊本は花果山の位置に言及しないから、魯府本の可能性があるのは【世徳堂本西遊記】であろう。朱本は前半については世本を省略する方向で【修正】する一方、【江流和尚】を独自の考えで復活させ、後半については楊本ないし【楊本】を杜撰に引用したもので、南明時代の刊行の可能性があると考えている。ちなみに、いわゆる『西遊釈厄伝』とは【世徳堂本西遊記】であり、魯府本の可能性があると考えている。なお童子戯の曹琳本と朱黄本はともに新旧部分が入り混じっており、いずれがより多く古い内容を留めているかを論ずることは出来るが、それにさしたる意味はないと考えている。以上が筆者の現在考える西遊記物語の成長の歴史である。

本論では、『玄奘三蔵渡天由来縁起』に反映されていると太田辰夫が主張する「西遊記の一古本（縁起本西遊記）」や、元・王振鵬の描いた『唐僧取経図冊』のもとづく『西遊記』などについては論じない。縁起本西遊記には日本で生まれた変種の可能性があり、『唐僧取経図説』所収の図と題の関係にはあやふやな点があり、そこに反映されているはずの難を想定すること自体困難と考えたからである。また『西遊記』の作者とされる呉承恩の経歴と関わりその存在が云々される周邸本や荊府本についても、その存在を主張する論者の間に闘わされる議論が、いずれもそれぞれの立場（地方志、書目、関連文献などに見える零細な記載のいずれを信ずるか）からの相手の論への攻撃にとどまっており、本論の、西遊記物語から原『西遊記』をへて【世徳堂本西遊記】、さらには世本にいたる『西遊記』の成長を想定する立場からの立論には関わらないと考え、触れないことにした。にもかかわらず魯府本に言及したのは、それに花果山のモデルとされる雲台山や【世徳堂本西遊記】の【江流和尚】との関係が感ぜられ、『西遊記』の成長との関係が深いと思われたからである。朱本と楊本の先後論争についても同様なところがあるが、【楊本】を第5次原『西遊記』とみなす立場からは触れずに済ますわけにゆかなかったからである。

なお『西遊記』と関係の深い『目連戯』にみえる西遊記物語をその成長史の中で過不足なく論ずることができなかつたことを遺憾とする。なおまた、附録1に加え、南通の童子戯において『西遊記』との関わりを指摘される、いわゆる「十三部半巫書」の一覧を附録2として掲げておいた。これは筆者がかつて『饜饕』第8号（2000年9月）に発表した「中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館所蔵の「石印鼓詞」について—「石印鼓詞」と「童子戯」—」に【表二】として附載したものを、『江淮神書』などを参照し増補したものである。

附録1							
世徳堂本・朱鼎臣本・楊致和本【西天取経】並びに曹琳本・朱黄本(唐僧取経)比較対表							
世徳堂本八十一難	略称：数字は回数	朱本 10巻67則 ：数字は則数	楊本4巻40則 ：数字は則数、ABCは則内 の順序	童子戯：○は有本文、△は有前及、数字はそれぞれの順序			
歴難の名称と順序				曹琳本 西遊記唐僧取経	朱黄本 唐僧取経	老抄本下 唐僧取経	
5 出城逢虎	13寅将軍	40 三蔵起程陥虎穴	13 唐三蔵被難得救A	○1 虎狼山	○1 交界嶺		
6 折從落坑					—		
7 双叉嶺上	13劉伯欽	41 双叉嶺伯欽留僧	13 唐三蔵被難得救B	○2	○3		
8 兩界山頭	14取孫行者	42~45 五行山心猿掃正 孫悟空除滅六賊 觀音顯聖賜緊箍 三蔵授法降行者	14 唐三蔵収伏孫行者	○4 五行山・繁梨園 ○6 六盤山・金角銀 角・貨郎兒	○4 五行山(兩界 山)・金沙童 子・定海針 ○5 八盤山		
9 陡澗換馬	15取龍馬	46~47 蛇盤山諸神暗佑 孫行者降伏火龍	15 唐三蔵収伏龍馬	○5 養慈澗・北海龍王 三太子・螭蟻王的 嫡外孫・定海針	△ 蛇盤山龍慈 澗・雁慈澗収 白龍馬1	△ 忘慈澗収白龍 馬1	
10 夜被火燒	16-17黑熊	48 觀音収伏黑妖	16 觀音収伏黑妖				
11 失却袈裟							
12 収降八戒	18-19収八戒	49 三蔵収伏猪八戒	17 唐三蔵収伏猪八戒	○7	○6 化け比べ・虫 の部下	○	
13 黄風怪阻	20-21黄風怪	50~51 唐三蔵被妖捉獲 孫行者収妖教師	18~19 唐三蔵被妖捉獲 孫悟空収妖教師				
14 請求靈吉							
15 流沙難渡	22収悟淨	52 唐僧収伏沙悟淨	20 唐僧収伏沙悟淨	○9 沙魚精	○10 柳(流)沙河・ 沙魚	○	
16 収得沙僧							
17 四聖顯化	23四聖	53 猪八戒思淫被難	21 猪八戒思淫被難				
18 五莊觀中	24-26五莊觀	54 孫行者五莊觀内偷菓	22 孫行者五莊觀内偷菓				
19 難活人參							
20 貶退心猿	27白骨夫人	55 唐三蔵逐去孫行者	23 唐三蔵逐去孫行者	○12 白骨山・五鼠行兵 鬧東京	△ 白骨山収白大 (夫)人4 ○8 老鼠山・五鼠 鬧東京	△ 白骨山収白夫 人4 ○ 老鼠山、五鼠 鬧東京	
21 黒松林失散	28-31黄袍怪	56~58 唐三蔵師徒被難 猪八戒請行者教師 孫悟空収妖教師	24~26 唐三蔵師徒被難 猪八戒請行者教師 孫悟空収妖教師				
22 宝象国捨書							
23 金盞殿交虎							
24 平頂山逢魔	32-35金角銀角	59~60 唐三蔵師徒被妖捉 孫行者収伏妖魔	27~28 唐三蔵師徒被妖捉 孫行者伏妖魔				
25 蓮花洞高懸							
26 烏雞国救主	36-39烏雞国		29~30 唐三蔵夢鬼訴冤 孫行者収伏青獅精				
27 被魔化身							
28 号山逢怪	40-42紅孩兒	61 唐三蔵収妖過黒河	31 唐三蔵収妖過黒河 32 唐三蔵収妖過通天河 A		△ 蘆溝橋収紅孩 子、觀音収去 帶在身7	△ 蘆溝橋吊紅孩 子、觀音収去 帶在身7	
29 風掃聖僧							
30 心猿遭毒							
31 請聖降妖							
32 黒河沉没	43鼉精						
33 搬運車遲	44-46車遲国						
34 大賭輸贏							
35 祛道興僧							
36 路逢大水	47-49通天河		32 唐三蔵収妖過通天河B	○8 陳家莊・洞庭湖鯉 魚精 ○16 溺水河・癩龜精・ 問仏	○9 白雲山・狼妖 怪即羊妖怪 △ 洞庭湖収鯉魚 精2	○ 白雲山・狼 (狼)妖怪即羊 妖怪 △ 洞庭湖収鯉魚 精2	
37 身落天河							
38 魚籃現身							

39	金兜山遇怪	50-52老君青牛	62 觀音老君取伏妖魔 子骨(母)河	33		△ 烏風洞取青牛怪5	△烏片洞取青牛怪5
40	普天神難伏			34	○14	○11 改陽山改胎井	○ 改陽山改胎井
41	問仏根源						
42	噴水遭毒	53-54女人国	63 孫行者被彌猴素乱A	35		△ 頼宝山收頼猴精6	△ 頼宝山收頼猴精6
43	西梁国留婚	55蝎子精					
44	琵琶洞受苦			62-63九頭鳥	37	○11	
45	再貶心猿	64 三藏過朱紫獅駝二国	38	○10 罽絳精			
46	難辨彌猴				65 三藏歷尽諸難已滿A 比尼国	39	
47	路阻火焰山	74-77獅駝国	66 三藏見仏求經	40	○17 溺水河・癩頭精・ 八個饅頭		
48	求取芭蕉扇					78-79比丘国	67 唐三藏取經团円
49	收縛魔王	80-83地湧夫人	68 三藏歷尽諸難已滿B	42			
50	賽坡掃塔	84-86滅法国					69 三藏歷尽諸難已滿C 比尼国
51	取宝救僧	87鳳仙郡	70	△? 西洋国取女妖怪9			
52	棘林吟咏	88-90九頭獅子					71
53	小雷音遇難	91-92犀牛怪	72	△? 西洋国取女妖怪9			
54	諸天神遭困	93-95玉兔					73
55	稀柿衝穢阻	96-97銅台府	74	△? 西洋国取女妖怪9			
56	朱紫国行医	98凌雲渡					75
57	拯救疲癯	99老龍作祟	76	△? 西洋国取女妖怪9			
58	降妖取后						77
59	七情迷没		78	△? 西洋国取女妖怪9			
60	多目遭傷						79
61	路阻獅駝		80	△? 西洋国取女妖怪9			
62	怪分三色						81
63	城裏遇災		82	△? 西洋国取女妖怪9			
64	請仏收魔						83
65	比丘教子		84	△? 西洋国取女妖怪9			
66	辨認真邪						85
67	松林救怪		86	△? 西洋国取女妖怪9			
68	僧房臥病						87
69	無底洞遭困		88	△? 西洋国取女妖怪9			
70	滅法国難行						89
71	隱霧山遇魔		90	△? 西洋国取女妖怪9			
72	鳳仙郡求雨						91
73	失落兵器		92	△? 西洋国取女妖怪9			
74	会慶釘耙						93
75	竹節山遭難		94	△? 西洋国取女妖怪9			
76	玄英洞受苦						95
77	趕捉犀牛		96	△? 西洋国取女妖怪9			
78	天竺招婚						97
79	銅台府監禁		98	△? 西洋国取女妖怪9			
80	凌雲渡脫胎						99
81	(通天河落水老龍作祟)		100	△? 西洋国取女妖怪9			
						《西遊記》上二十部、事多年久記不清、若把取經念完了、難表翠蓮女佳人	《西遊記》上二十部、事多年久記不清、若把取經念完了、難表翠蓮女佳人

附録2 十二部半巫書一覽

曹琳A論文十三部半巫書	曹琳D書	曹琳C論文十三部半巫書	曹琳D書十三部半巫書	『十三部半巫書』	『江淮神書』
開荒	開荒(半本)	開荒(半本)	開荒(半本 黄学祖手抄本)4p	開荒(半部 黄学祖供稿)5p	
袁樵擺渡	袁樵擺渡	袁樵擺渡	袁樵擺渡(秦梅茶手抄本)21p	袁樵擺渡(胡錫燾・黄学祖供稿)32p	袁樵擺渡(原有江抄本)7p
袁天罡算卦					袁天罡算卦 8p 下錄
魏敬斬龍	袁天罡袁亮卦斬老龍(唐太宗遊地府)		袁天罡袁亮卦斬老龍(胡錫燾手抄本)16p	袁天罡袁亮卦斬老龍(黄学祖供稿)22p	魏敬斬龍 9p
江流兒出世	江流兒出世	陳子春被舊龍宮招親 (江流兒出世, 雷僧出世, 三公像, 三元辰)	陳子春(秦梅茶手抄本)20p	陳子春・雷僧出世 (周秉如・胡錫燾供稿)90p	龍王告状(原有江1901年5月抄)5p 唐王遊地府(原有江1908年1月抄)23p 三王好番(原有江1901年5月抄)10p
唐僧取經	唐僧取經	西遊記唐僧取經	西遊記唐僧取經(胡錫燾手抄本)35p	唐僧取經(胡錫燾供稿)50p	陳子春上任(次稿11年抄)18p 江流認母(光緒11年抄)9p
劉全進瓜	劉全進瓜	劉全進瓜(李意運借殿還魂, 劉全進瓜借殿還魂)	劉全進瓜(陳梅茶手抄本)28p	劉全進瓜(周秉如供稿)38p	唐僧取經上下(原有江191年7月抄本)35p 唐僧取經下(老抄本現藏院藏館民國17年)6p 劉全進瓜(竹林堂院藏卷 祭曆全月・甲戌11月)36p
五岳開皇宮 收瘟斬荼(??)	五岳開皇宮	五岳開皇宮(新居收瘟斬五岳)	斬岳收瘟(陳梅茶手抄本)7p	收瘟斬岳(斬五岳 黄学祖供稿)13p	斬五岳(原有江1987年2月抄)15p
魏九郎替父請神	魏九郎替父請神 九郎宮出朝	魏九郎替父請神 (九郎替父, 九郎請神, 進出朝, 出朝)	魏九郎替父請神 (胡錫燾手抄本, 徐桂芬手抄本)17p	魏九郎替父請神 (黄学祖・胡錫燾供稿)23p	宣魏敬王二下書(原有江1991年5月抄)19p 魏九郎出家 (老太太家書, 九郎辭學, 高山傳宝, 回家會母, 進京敬父)(四知堂 050年冬月)27p 天文地理(原有江1988年3月抄)9p
魏九郎借馬開東海	九郎借馬開東海	魏九郎借馬開東海	九郎借馬開東海(徐良手抄本)7p	魏九郎借馬(江万聖供稿)10p	
魏九郎借鞍借轡	九郎借鞍借轡	魏九郎西京買鞍轡	九郎西京買鞍轡(徐良手抄本)6p	魏九郎借鞍(江万聖供稿)7p	龍宮借馬開鞍轡(原有江1989年3月抄)22p
魏五郎遊地府	五郎遊地府	五郎遊地府(十八闕(細闕))	魏九郎借鞭(秦梅茶手抄本)16p	九郎借鞭(胡錫燾・黄学祖供稿)24p	
唐王太子遊月宮	九郎請星迷路	九郎官請星迷路	請星迷路(陳梅茶手抄本)4p	五郎遊地府(胡錫燾・黄学祖供稿)33p	
魏九郎請星迷路(半本)	陽元請神	九郎陽元請神(魏陽元)	陽元請神(徐錫燾手抄本)7p	請星迷路(黄学祖・李金玉・黄学祖供稿)9p	
曹琳A論文：「江淮平原上の古靡餘風 南通童子祭祀活動概覽」(『民俗曲芸』70、1991.3)、曹琳B書：『江蘇省南通市開東鄉公園村漢人的免災勝會』(『民俗曲芸叢書』42、1996.7)、曹琳C論文：「現 教伝人―南通童子胡錫燾」(『民俗曲芸』117、1999.1)、曹琳D書：『江蘇南通童子祭祀儀式脚本』(『民俗曲芸叢書』76、2000.6)					

## 西遊記物語的成長—至到世德堂本

大塚秀高

『西遊記』是，自從『大唐三藏取經詩話』以後，經過以童子戲〈唐僧取經〉、『朴通辭諺解』、『迎神賽社禮節傳簿四十曲調』、福州平話西遊記、楊致和本（楊本）可想定的，第1期、第2期、第3期、第4期、第5期的原『西遊記』後，成立了【世德堂本西遊記】。世德堂本（世本）是再從【世德堂本西遊記】中消除了【江流和尚】的情節而成立的。朱鼎臣本（朱本）是合楊本（或其祖本【楊本】）和世本而由独特的見解恢復【江流和尚】的簡本。

**關鍵詞：**原『西遊記』 【世德堂本西遊記】 童子戲〈唐僧取經〉  
【江流和尚】